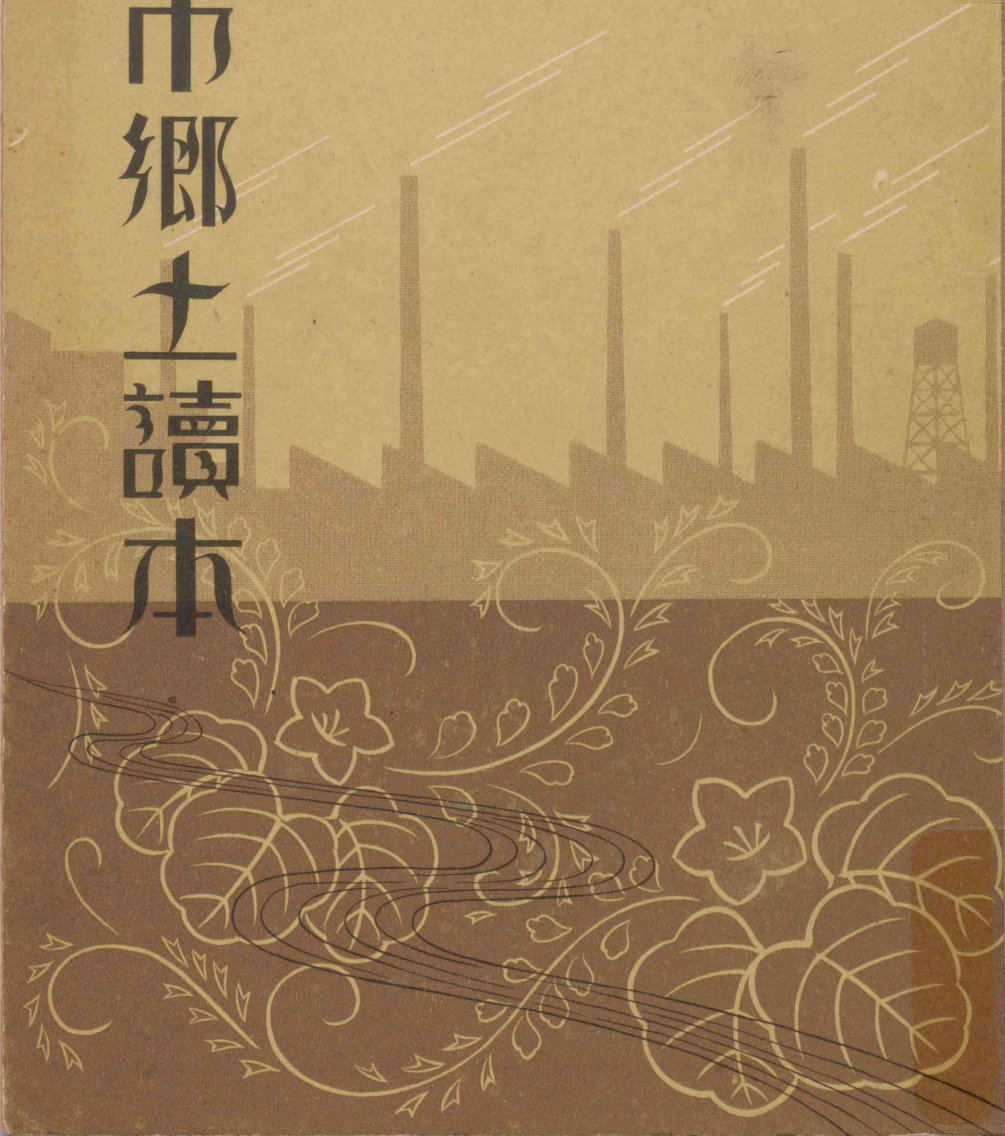
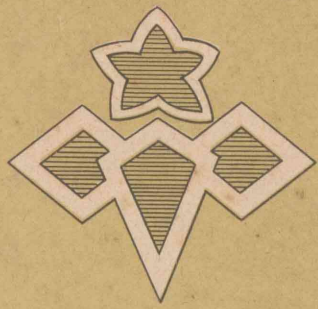
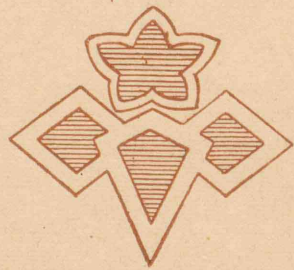


桐生市郷土讀本

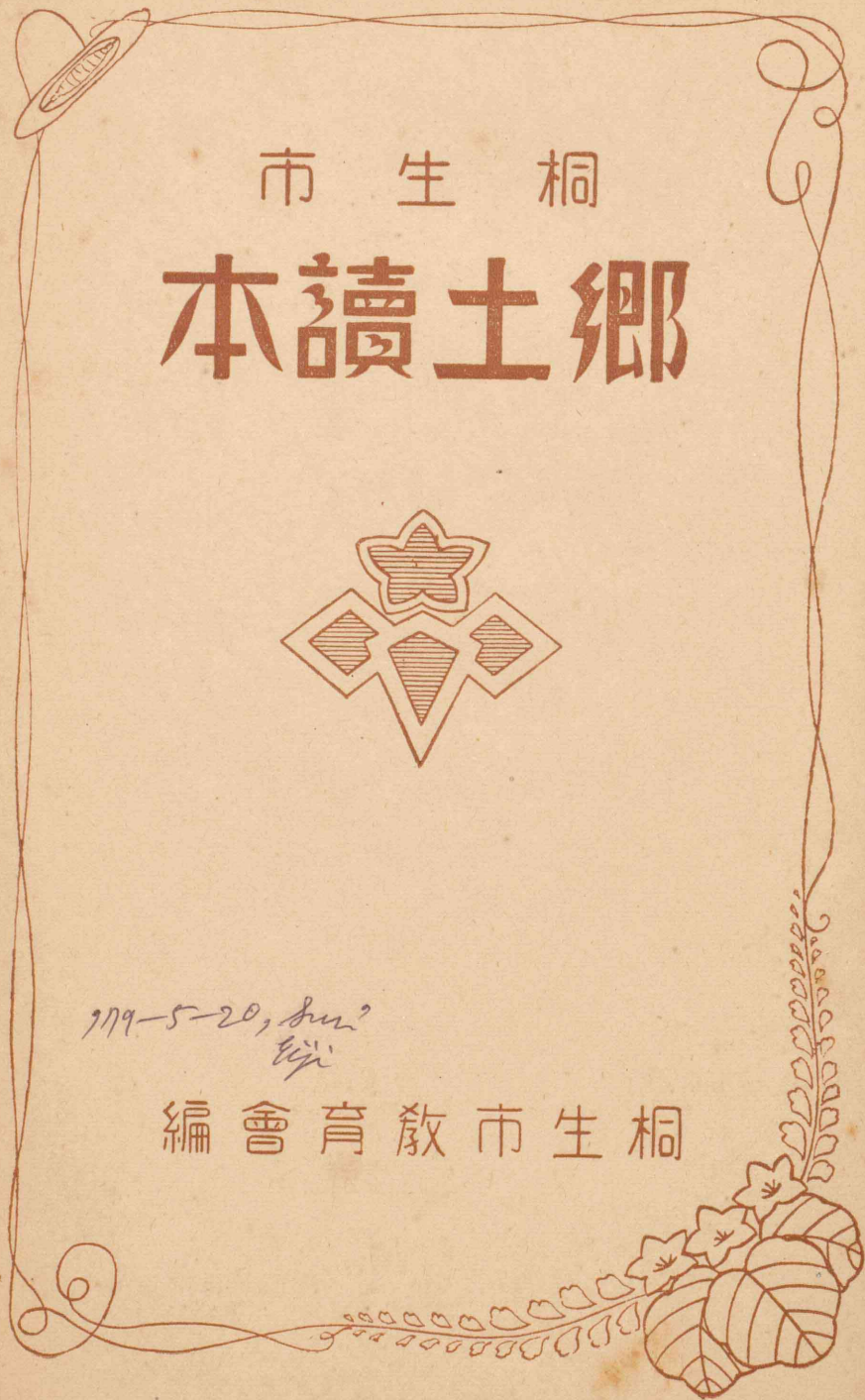


桐生市
郷土讀本



1919-5-20, Sun?
Eiji

桐生市教育會編



はしがき

一、人は誰でも我が家を思ふやうに、我が郷土を思ふものです。郷土の自然や文化を深く知ることには、誰にも大切であります。産業に、教育に、宗教に、郷土の本質をよく理解すれば、郷土愛の精神が涵養され、郷土の伸展繁榮に貢献することゝなります。

一、桐生が生れてから既に幾百年になります。その間、幾多の先覺偉人の指導と、祖先の努力とで、今日の盛な桐生市がつくられました。私たちは、今日の郷土を更に立派にして、光榮ある大桐生に築き上げなければなりません。

一、本書の編纂は、全くこの精神によつたもので、桐生市の昔をたづね、今を知り、將來を圖る材料を集めて、愛郷心を涵養する一助と

したのであります。愛郷心は推し擴げれば愛國心となります。一、本書の程度は、大體小學校上級學年、又は、青年學校の課外讀本として、使用し得るやうに致しました。

一、本書の編纂は、桐生市長關口義慶二氏の依囑によつて、始め、市内小學校及び圖書館の職員、並に市役所教務課員を煩はし、次で、當市出身の文學博士中村孝也先生の、懇切なる校閲修正を得ました。茲に深く感謝いたします。

一、公務にある方々が忙しく纏めたので、遺漏の點がないとはいはれません。更に訂正増補を期して居ます。

昭和十三年十二月

桐生市教育會

桐生市郷土讀本目次

第一	吾妻山	一
第二	桐生大炊之介祐綱	八
第三	伸び行く桐生	十四
第四	行幸の光榮	二十
第五	お宮詣で	二十八
第六	桐生の織物	三十五
第七	工場巡り	四十五
第八	市民の鑑(その一)	五十三
第九	桐生市政の話	六十
第十	學校だより	六十六

第十一 市民の鑑(その一)……………七十二

第十二 夏祭と恵比壽講……………八十

第十三 我が市の交通・通信……………八十五

第十四 名勝をたづねて……………九十二

第十五 市民の鑑(その三)……………百十

第十六 水道問答……………百六

第十七 お寺参り……………百十三

第十八 桐生市圖書館……………百十八

第十九 新川運動場……………百二十七

第二十 市民の覺悟……………百三十一

終

桐生市郷土讀本

桐生市教育會編

第一、吾妻山

東國に名高き赤城山の麓の山々が紫に霞む處、渡良瀬川の清き流れにはぐ、まれて、すく／＼と伸び行く我等が郷土、大桐生の英姿よ。

我等が郷土の誇りなる吾妻山は、標高四百八十米、雷電山、琴平山、桐生ヶ岡の諸丘を従へて、桐生市の北邊に牡牛の如く聳え、朝には山氣爽かにして、旭日の光を含み、工場すこやの氣笛に和して、健かなる一日の活動をた、へ、夕には藍

色深くして、灯ともる郷土の家々を抱きて安らげき眠りを守る。吾妻山、あゝわが郷土の山よ。

光明寺わきの九十九折の小徑を辿り、若松の下をくぐり雑木林を踏み分け、木の根をたよりに一步又一步、とんび岩に息つき、胸を突くばかりの急坂を攀ちて頂上に至れば、眼下に一幅の繪卷をひろげたやうに横たはれるのは、實に我が桐生市の姿である。見よ、林立する無数の煙突を。濛々として空を覆へる黒煙こそ、工業都市大桐生の息吹である。楯比する市街、數多き鋸屋根の工場、宏壯なる學校、鬱蒼たる神社の森、祖先の御靈の眠りますお寺の屋根、さては往き來の人を運ぶ汽車、電車、滿々たる水をたゝふる郊外の阿左美沼など、手に取る如く見渡される。

わけても中心地なる織物市街附近の道路に、自轉車、自動車などの織るが如くに往きかふ有様は、さすがに桐生市發展の心臓とうなづかれて、たのもしき限である。

眼を舉ぐれば一望千望、遠く東南に開くる關東大平野の彼方こそ、畏くも天皇陛下のおはします所である。南の方、廣澤の連岡を隔て、遠く暗紫色に連るは秩父の連山である。晴れた日には靈峰富士の頂もその上に幽かに銀の光を放てるをみるであらう。建武の忠臣新田義貞公、幕末の志士高山彦九郎先生に由緒の深き地太田の金山は指呼の内にある。帯の如く流るゝ清流、渡良瀬川に沿うて眼を轉ずれば、大間々町の後方、遠く桔梗色の空に、悠然として巨人の如く白煙をなびかせるは、雄々し



吾妻山よ

くも崇^{たか}高き淺間火山の偉容である。その一度怒るや、上州の山河爲めにふるひおののき、噴煙しばらくは我が市の上空をも覆ひかくすことがある。

更に首を右に廻らせば、上毛の名山赤城の雄姿を望み見るであらう。黒檜地藏の諸峰は巍^き然として紺碧^{こんぺき}の空に太き線を畫し、濃藍色に限どれる山肌は、人に迫るが如



眺のり

く、その裾野の遠く背後には、榛名山・妙義山の峯々も競ひ立つて見える。

東北には、日光・足尾の連山が重疊し、男體山の頂は赤紫色の山脈の彼方に聳えてゐる。

山紫水明の郷、昔は、その清き流れによつて、織物業を發生せしめたといふ桐生川は、根本山に源を發し、市の東方なる栃木縣菱村の山々の麓

を流れて渡良瀬川に合する。

春霞が野山をこめて、谷あひの杉の根元の淡雪が消える頃になれば、吾妻の峯はやうやく眠りよりさめ、全山の若芽は皆萌え出で、山の遠近とちこに藪鶯のふくみ聲がのどかに聞える。日ごと和かなる織機の響を抱いて、山は夢の如く安らかにいこふ。

水清き桐生川のせゝらぎに、河鹿の鳴き初むる頃には、連山は皆緑衣に覆はれる。炎熱焼くが如き日、一片の黒雲が吾妻の峯にかゝると見る間に、忽ちパラ／＼と來る夕立の雨に、木々は皆奮ひたつて緑の怒濤がさかまき、萬物生きたる心地もなきことしばし、やがて雷鳴が遠く去れば、天地よみがへりて全山の緑また一しほの風情を添

へる。

七夕祭、盂蘭盆會ぼんねも過ぎ、すゝき女郎花などを賣歩く姿が、町の辻に見える頃より、木々の下葉はやうやく色づき、糸より細き秋雨に、山々は錦を飾り、茸狩、栗拾ひの人の呼びかはず聲が聞えるのも興が深い。

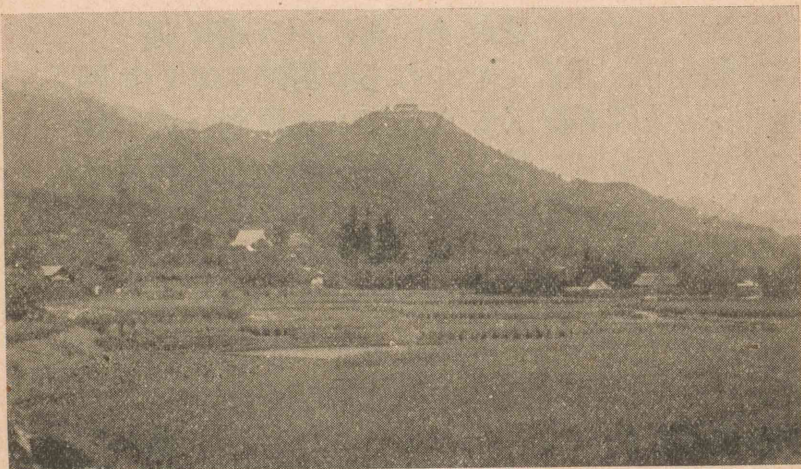
霜月、師走を過ぐれば、寒い北風が木末を揺がして吹きすさび、落葉は小徑をうづめ、山は薄化粧して冬ごもりの仕度を急ぐ。雪を含める赤城嵐にさいなまれては、凍てつける山は、唯聲もなく、工場の汽笛に耳をかたむけるばかりである。

幾百千年、山は泰然として動かず、川の流れは常に清らかである。あゝ、我が愛する郷土桐生よ、この山の如くこ

の川の如く幾久しく、しかも年と共に益々榮えあれ。

第二、桐生大炊介祐綱

桐生氏の祖は、藤原秀郷の末裔、桐生六郎であるといはれてゐる。六郎は源平合戦の時、足利俊綱の郎黨として大いに武名をあげた。六郎の子孫は代々梅田村大字上久方に住んで居たが、國綱に至つて始めて桐生地方を從へて家名を興した。國綱は、正平五年梅田村大字上久方の檜杓山に城を築き桐生氏の居城とした。桐生城はまた檜杓山城とも呼ばれる。その翌年、丸山の麓から淺間山の麓まで新川を堀割り、渡良瀬川の水を引き入れて要害とし、丸山、淺間山に夫々物見番所を設けた。今は、この



桐 生 城 趾

新川に、盛運橋の外六つの橋がかゝつてゐる。桐生城が要害堅固であつて、如何に難攻の城であつたかといふ事は、後年大炊介祐綱の時、上杉謙信が三度もこの城を攻め落さうとして、遂に志を遂げず、中止したのによつても明らかである。國綱は又梅田村に西方寺を建立して桐生氏の菩提所とした、これで桐生氏の基礎は全く定まつた

のである。

國綱から八代目の孫に靱負丞（ひきまへ）重綱が出た。重綱も亦強い大將で、兵を渡良瀬川上流に出して、今の黒保根村一帯の地をその所領としたが、惜しいことに、永正十三年、荒戸野で鷹狩をした時、乗馬「浄土黒」が倒れたので、馬から落ちて遂に卒去した。荒戸野は、天満宮の南一帯の地であつた。今は桐生の市街地となつてゐるが、昔は人家が乏しく廣々とした野原であつた。

重綱の子が大炊介祐綱である。祐綱は幼名を又次郎と稱し、入道してから天心と號した。幼少の時、足の病氣を煩ひ、遂に跛になつたが、劍道の達人でもあり、飛鳥のやうに速く走ることが出来たといふ。父重綱の後を承け

てよく領内を治め、桐生氏の全盛時代を開いた。

大炊介の時代は、所謂戰國の世で、英雄が四方に競ひ起つて戦争の絶間がなかつた。その中で大炊介は、天文十三年、菱の領主細川内膳を滅して、領地を桐生川の對岸に廣め、更に同年、勢多郡膳の城主膳因幡守が、精兵五百餘騎を率ゐて、間の原（渡良瀬川と新川の間の野原）に押寄せ、て來たのを、邀へ撃つて大いに之を破り、長驅して膳の城に押寄せて遂に因幡守を降した。由つて桐生氏の勢力は、南は渡良瀬川を境とし、西は膳、東は菱、北は梅田、黒保根に至る廣大な地方に及び、附近の強敵も、桐生氏を恐れて一指をも觸れる事が出来なかつた。

大炊介は、一時上杉謙信に屬したので、謙信が近衛前久（さきひさ）

公父子の御供をして關東に來た時、要害の堅城である桐生城にしばらく滞在して居たことがあつた。

戰國の世ではあつたが、大炊介はよく領内を治めて、領民の幸福をはかつた爲め、城下町である町屋地方は非常に繁榮した。そして弘治元年、老病の爲め眠るやうに逝去した。時に歳六十六。この話が一度傳はると、領民はもとより、他領の人々まで、惜まぬ者はなかつたといふことである。

大炊介の後を繼いで桐生の領主となつたのは、養子の親綱であつた。然るに親綱は暗愚であり、桐生家譜代の功臣を疎んじて、佐野から伴つて來た家臣に、萬事を委ねて顧みなかつた爲め、不平の心をいだく者はひそかに外

小俣川
桐生川の末流
新川の

敵と通じた。それ故、桐生氏の滅亡遠からずと眉をひそめぬ者はなかつた。果せるかな、天正元年三月、新田堀用水の事から、新田金山の城主由良成繁は、藤生紀伊守を大將として、兵を三手に分けて攻め寄せて來た。その一隊は、桐生氏の要害である新川の河口を塞いで河水をせき止め、小倉峠に居た内應軍二百を道案内として、川内村から城の西搦手に向ひ、他の一隊は、葉鹿町附近で渡良瀬川を渡り、密かに菱の山中を通つて、城の東搦手に向ひ、更に本隊は、下菱から城の大手に馳せ向つた。そして、小俣川の激戦に城方を打破つた金山勢は、勝ちに乗じて引兩の旗を眞先に押立て、破竹の勢をもつて本城に迫つた。大手の守將山越出羽守は、桐生川の東岸中里山の麓の戦で、

手兵五十餘騎と共に討死し、搦手の大將は、敵に内應したので、さしもの桐生城も遂に陥ちてしまひ、親綱は佐野に逃れて空しく死し、その妻子は逃げゆく途中で自殺し、桐生氏は全く亡びた。正平五年桐生國綱が初めて築城してから、天正元年落城に至るまで、實に十代二百二十四年の生命であつた。

桐生氏系譜

藤原秀郷……桐生六郎……國綱……元義……豊綱……義綱

正綱

在俊……親康……重綱……祐綱……親綱

豊綱・親綱
佐野からの養子

第三、伸び行く桐生

桐生市の起源

桐生市は、昔荒戸村（又は荒處）といつた。その附近一帯はその頃荒野原であつた。

桐生の語源は、此の地方が山間にあり、霧の發生が多かつた故、霧生といつたのが轉化したものであらう。

鎌倉時代の初め、桐生氏の居つた梅田村上久方檜杓山下の居館附近は、實に桐生發祥の地である。

桐生氏中興の祖國綱の世になつて、領土を擴張し、よく民を治め、桐生地方の織物を奨励し、西方寺を創建する等、桐生氏全盛の基礎を固めた。

次いで、桐生氏の後を襲いだ由良成繁も、亦この地方によつて善政を施したので、城下町は次第に繁榮した。天正十八年、桐生城主由良國繁が、常陸牛久に遷された後、徳

川氏の代官大久保長安の手代大野八右衛門尊吉の手によつて、桐生新町(今の本町通)の町割が定められた。即ち、天満宮前から新川まで、東西約百六十米、南北約千百米が市街地として區劃され、圓満寺北方丘陵地の一部は、御役所町となつて陣屋が構へられ、だんく都市形態が整へられた。この桐生新町の發達の主なる原因は、桐生絹市の開始と桐生織物の革新とであつた。その後織物業の盛になるにつれて、桐生の町は次第に産業都市となり、遂に現在に於けるが如く純然たる商工業都市に發展したのである。

桐生新町は、明治元年岩鼻縣に屬し、同四年栃木縣の管轄となり、同九年群馬縣管下に入り、同十一年山田郡役所

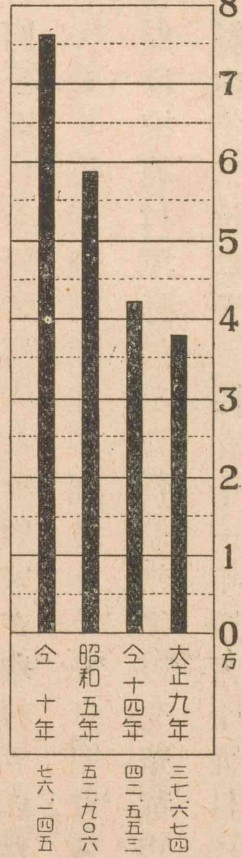
が置かれるに及んで之に屬したが、市町村制の實施に當り、明治二十二年四月一日、桐生新町・新宿・東西安樂土及び下久方を合併して桐生町と稱し、爾來目覺しき發展を遂げ、大正十年三月一日に至り市制が實施せられ、同年四月一日岡公園において盛大な祝賀式が舉行された。

それより後、市勢は躍進に躍進をつゞけ、昭和八年四月一日には模範村境野村を合併し、幾多の先輩都市を凌駕して縣内第二位に登り、昭和十一年四月十九日には、盛大なる市制施行十五周年記念式が舉行せられ、市民は、その限りなき發展を祝したのである。回顧すれば、村から町、町から市となり、昭和五年には、全國百九市中の六十三位を占めた。曩に大正九年の國勢調査では、桐生市よりも

發展の概況

昭和十三年十二月末
調
戸数 一七、六三四
人口 一〇〇、四六六
(男 四七、〇六五)
(女 五三、四〇一)

桐生市人口増加表



(在現日一月十)
(ルヨニ査調勢國)

人口が多かつたのに、昭和十年の國勢調査では桐生市よりも人口が少くなつた市が二十一市もあつたのによつて見ても、本市の發展狀況は眞に驚嘆すべきものがある。加ふるに昭和十二年四月一日には人口八千を有する廣澤村を合併したので、本市の人口は一躍九萬を突破し、今では全國百五十に近い市の内第五十位以上に進み、全國有数の都市となつたのである。

現今の桐生市は、機業に商業に教育に土木に衛生に、そ

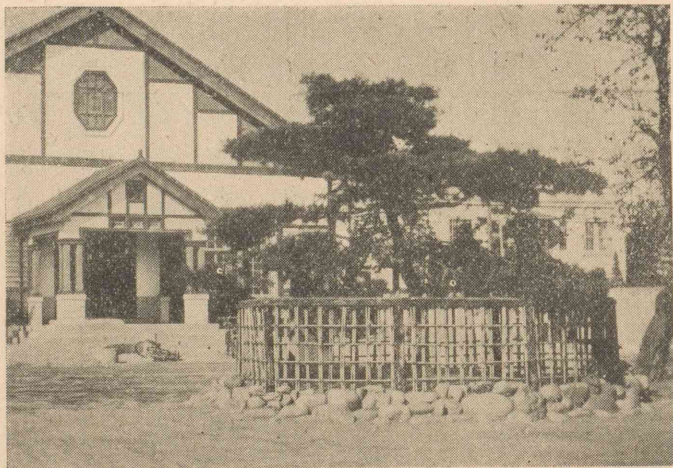
市制施行時と現在の比較

昭和二十年	大正十年	種別
16,309	6,701	戸数
92,899	43,155	人口
2,628	1,529	出生
1,309	834	死亡
10,267	5,152	児童数
14,999	2,884	機臺数
13,195	5,945	職工数
1,822	842	市道路線
348	157	km
1,817	533	電話口数
126	64	橋梁数
596	211	m
101	4	乗用自動車
69	2	貨物自動車
249	15	自動車
13,475	3,090	自転車

の他すべてに亘つて、近代的都市施設が日に月に隆盛に向つてゐる。新築される新工場、擴張される學校、鋪装される道路、改修される橋梁等、大桐生市の面目は年を追うて改まつてゐる。こうした織都桐生の地位は、關西の京都と並んで、世界織物市場にその名を高めつゝある。

第四、行幸の光榮

上州は、遠い昔の文化の開けた國であり、皇室の御恩澤を被ることが多かつた。畏くも 大正天皇には、明治三十五年五月、皇太子の御時、地方の人情風俗・産業・教育其の他古跡等を御巡察のため、關東北部東北地方に御巡啓あらせられた時、前橋市に御滞在中、六月三日桐生町にも行啓遊ばされることの仰出があつた。感激した町民は、道を開き、橋を架け直し、熱誠を傾けて奉迎しまゐらせた。當日 殿下には東宮大夫以下を御供として御着車あらせられ、桐生驛よりは人力車に召され、路傍に堵列する町民に一々御會釋を賜りながら織物學校に成らせられ、親



西小學校お手植の松

しく生徒の學習や學校の模様を御覽遊ばされ、次で森山工場御視察の後、丸山へも御登りにならせられ、やがて西尋常小學校に御成り遊ばされた。

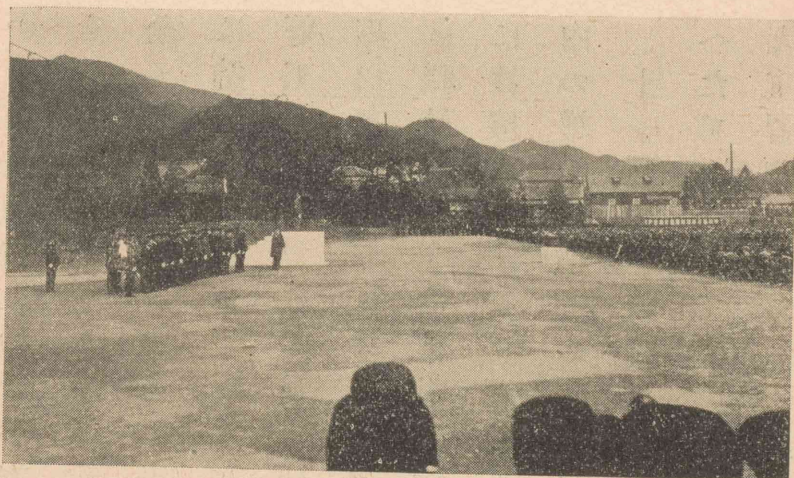
現在、同校の講堂の前、垣を廻らせる中に「皇太子殿下御手植之松」といふ石標の建てられた一本松が茂つて居り、御使用の御鍬御シヤベル御椅子は、丁寧に保存されてある。殿下には、それより新道幸町通を御通り遊ばさ

れ、桐生驛より前橋に還啓あらせられた。それより三十三年の後、畏くも今上陛下の行幸を仰ぐことになつた桐生市の感激は如何ばかりであつたらうか。

陛下には、昭和九年十一月十日より十八日まで九日の間、前橋市におとゞまりになり、陸軍特別大演習を御統裁の後、更に各地方に行幸遊ばされ、或は神社を御拜あらせられ、或は教育、産業等を御視察になり、次で各種團體に御親閲を賜つた。これより先、十六日桐生高等工業學校、機織天覽場として西尋常小學校、消防組御親閲場として新川運動場の三箇所に行幸あらせられる旨を仰出された。市民は無上の光榮に感激し、全市を舉げて準備に取りか

かり、市長、助役を始め各方面の人々は一致協力して、道路を修理し、堀をさらひ、衛生にも力を注ぎ無事に奉送迎を全くし得るやう夫々神社に祈願を行つた。御道筋道路は舗装され、停車場前等には大奉迎門が建てられた。高等工業學校では、職員の研究物を始め實驗室や工場の整理に努めた。機織天覽場に當てられた西尋常小學校では、職員、兒童共に神明に祈りつゝ、準備に力を盡し、機織場には機械をすゑて運轉した。この間、新川運動場でも場内の準備、御道筋の用意に心をくばつた。

十一月十日秋晴れの靜かな日、我が群馬縣は聖駕を迎へたてまつつて光榮に輝いた。この日より十四日まで大演習御統裁の傍、十二日には産業御奨励の有難い御



桐生高等工業學校奉拜場

思召により、桐生市に御使を御遣し遊ばされ、御聖旨を御傳達あらせられた。そして地方行幸の第二日なる十六日、當市に行幸あらせられたのである。この日、空は朗かに晴れわたり、沿道は紅白の布で美しく飾られ、市民は謹んで路傍に居並び、御英姿を拜まうとして御待ち申し上げた。いよ／＼御着輦を拜しての感激は到底筆紙

には盡されない。御鹵簿は一路高等工業學校に向はせ

られた。



桐生西尋常小學校奉迎門

上州各地の中等諸學校、市内及び近接町村小學校三十八

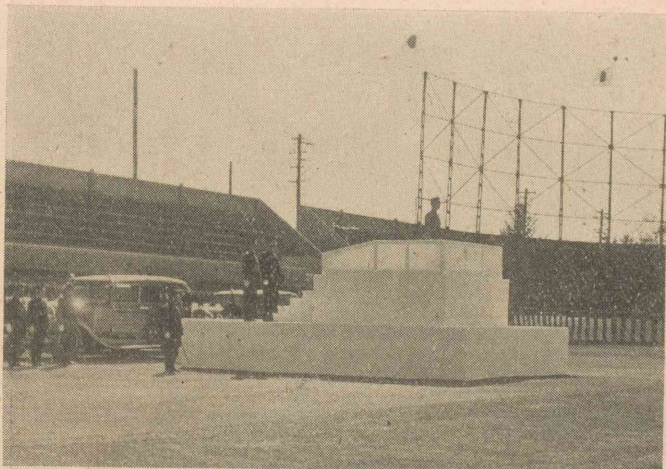
陛下には、同校職員及び生徒の御出迎へを受けさせられ、校長より親しく學校の模様を御聽き遊ばされ、且生徒の實習にも御眼をとゞめさせられたといふことである。やがて奉拜場に臨御あらせられ、桐生高等工業學校を始め東

校、約一萬六千人に奉拜を御許し遊ばされた。崇高な

御英姿を間近く仰ぎ得た一同は、尊嚴に打たれて、咽び泣く者さへあつた。

それより陛下には、本町通より西尋常小學校に行幸あらせられた。校庭には、市内各小學校兒童代表千六百名が恭しく奉迎申上げた。

御座所の御椅子は、大正天皇が未だ皇太子に渡らせられた御時、御用ひ遊ばされた御品をそのまま、御使用



(場動運川新) 場閱親御組防消

せられた御時、御用ひ遊ばされた御品をそのまま、御使用

遊ばされた。尙、御父皇の御使用遊ばされた御鍬、御シヤベルを特に天覽遊ばされたことは誠に畏き極みである。御少憩の御



(庭校學小西) 碑念記幸行

暇もあらせられず、知事の奏上する縣下織物界の現状を聽召され、更に玉歩を機織場に運ばせたま

ひ、原料・製品機織の實況等を天覽遊ばされた。

次で新川運動場で、群馬・栃木・茨城・新潟・長野六縣下の消防組員一萬餘名を御親閱あらせられ、天機麗しく足利市

に向はせられた。

あゝ感激の十一月十六日、桐生市はこの日の光榮を永久に記念する爲め、西尋常小學校に「行幸記念碑」を建て、毎年この日には、市役所及び各小學校において、記念式その他の行事を實施し、感激を新にして聖恩に報い奉ることをつとめてゐる。

第五、お宮詣で

天満宮

桐生市の北、本町一丁目大通から北に向つて、正面にある御影石の大鳥居をくゞり、廣い境内の碑や燈籠を見ながら、長い切石の上をしばらく行くと、太鼓橋の向ふに大きな神社があります。之が天満宮です。參拜してから、

社殿の彫刻を見ると、細かく巧みに彫つてあつて、誰でも驚かない者はありません。

天満宮は、昔、景行天皇の御代に、天穗日命を桐生川のほとりにお祀りして磯部明神と申してゐたといはれてゐます。その後、桐生國綱の時、そのお社を今の地に移し、天穗日命の御子孫である菅原道真公の御分靈を、京都の北野天満宮からお受けして合せ祀り、桐生天満宮と改稱し、桐生領五十四ヶ村の總鎮守と定め、それより地方の人々は一層崇敬いたしました。慶長五年、徳川家康が、上杉景勝を討つ爲め、下野國小山に下つた時、上方で石田三成が兵を起したことを聞いて、家康は、天満宮に戰勝を祈り、その上「桐生領から急いで旗絹を出すやうに」と

言はれたので、五十四ヶ村の人々は、晝夜休まず織りつゞけて、二千四百十疋の絹を造り、之を天満宮の庭に持ち寄り、戦勝の祈禱をなし、お札や旗竿までそへて差上げたところ、やがて家康の軍が大勝利を得たので、徳川氏はそれより代々大へん天満宮を崇敬されました。この頃から、絹物織をお社の境内に持ちよつて賣買をするやうになりました。そこで人々は、神社を立派にしたいと考へ、今



縣 社 天 満 宮

より百八十年ばかり前、三十餘年間もかゝつて、今見るやうな美しい社殿に建てかへたのださうです。この天満宮は、昭和三年四月四日縣社に列せられました。桐生ヶ岡公園に續いて、大きな神社が三つ並んでゐます。向つて左にあるのが郷社美和神社です。中央は琴平神社で、右が西宮神社ですが、何れも美和神社の末社です。美和神社は、今から約二千年ばかり前、崇神天皇の御代に、この地方にはやつた悪病を除かれる爲め、醫藥の神として崇敬された。大物主命(大國主命)をお祀り申してから、長く延喜式内上野十二社の一として、地方の人から崇敬されてきました。

丸山公園の東ふもとの、こんもりとした杉森の中にあ

美和神社

白影神社

るお社が村社白髭神社です。むかし天孫瓊々杵尊が

御降臨になつた時、日向へ道を御案内申し上げた猿田毘古神をお祀りしてあります。

旭町に、宇迦之御魂神

(豊受大神)を祭神とする

村社稻荷神社があります。

俗に常木稻荷と稱せられて居ります。

新宿には、譽田別尊(應

神天皇)をお祀りしてある村社八幡宮があります。八



郷社美和神社

稻荷神社

八幡宮

諏訪神社

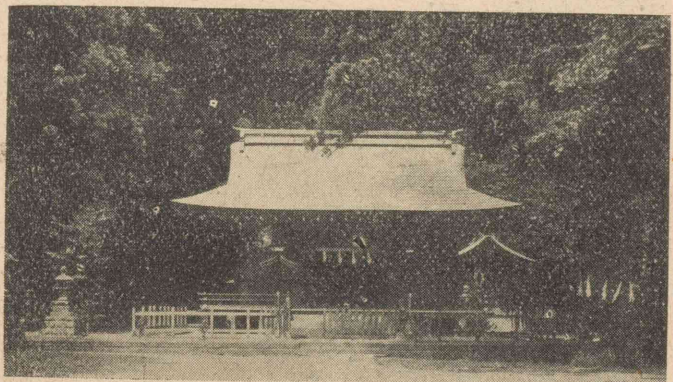
幡宮は、今から凡そ三百七十年ばかり前に創建されたもので、新宿の鎮守の神としてむかしから崇敬されて居ります。

境野町には、建御名方富命と、八坂刀賣命の御二柱を祀る村社諏訪神社があります。むかし、信州諏訪神社の宮司の長子が境野に来て居たころ、まだ鎮守様がなかつたので、村の人たちは靈驗あらたかな諏訪神社の御分祀を願つて、この諏訪の森に祀つたのがはじまりだといはれてゐます。

賀茂神社は、廣澤町六丁目、賀茂山の麓にある郷社で、崇神天皇の御代、豊城入彦命が、東國鎮護の爲め、別雷神を祀られたのがはじめであります。美和神社と同じ

賀茂神社

比呂佐和神社



郷社 賀茂神社

く、むかしから上野式内十二社の一として、大へん厚く崇敬されました。又、奥羽に兵亂があつた折などは、征討將軍は必ずこの神社に戦勝を祈願せられたさうです。源義家も亂賊追討の爲め奥羽に下る時、この社に戦勝を祈願し、平定凱旋の時も亦、參殿されて神樂を奏したといふことで、今でもその遺跡が残つてゐます。

和神社があります。

主神は 大穴牟遲神でありますが、

廣澤町三丁目に、村社比呂佐

其の他の神社

俗に赤城神社と稱せられて居ります。

其の他、錦町一丁目に、大雷神を祭神とする雷電神社があり、境野町には、別雷神を祀れる加茂神社が二ヶ所ありますが、何れも無格社です。

これ等の神社は、社格に應じて、縣や市から供進使が參向して、例祭・祈年祭・新嘗祭には嚴かな祭典が行はれる外、神社によつては春秋に祭典がありますが、一身一家一國の重大事の時に報告・祈願等は勿論、日常神社を崇敬して參拜する者が絶えません。このやうに敬神の念の厚いのは我が國の特色であります。

第六、桐生の織物

織物の歴史

あや子は、途々父の顔をのぞいて、先程からの話のつゞきをたづねた。

あや子「川内村の白瀧神社はどなたを祀つたのでせう」

父「白瀧姫といふ方をお祀りしたのだ。そのいはれを話さうか。今から千二百年程昔のことであるが、上野國山田のさと仁田山から、山田某といふものが夫役に徴されて朝廷にお仕へ申し上げてゐる中、官女の白瀧姫が、たはむれにこの男に歌をよんだ。ところが、この男も直ぐに歌をよんで答へた。その事が、天子様の御耳に達したので、御感じのあまり、白瀧姫を男に賜つた。男は大層よろこんで故郷につれ歸つた。白瀧姫は、蠶

をかふことや、糸繰機織等をよく知つてゐたので機織の業を里人に教へた。それがもとで機織がだん／＼ひろまつたといひ傳へられてゐる。だから白瀧姫を尊んで、機神様として神に祀つたのさ」

あや子「ずるぶん古い昔の事なんですね」

父「さうだ、桐生ではそんな古い昔から織物が出来たのだ。その後、新田義貞の旗擧げの時の旗や、關ヶ原の戦の時、徳川家康が用ひた旗にも、桐生の白絹が使はれたといふ話だ。白絹ばかりではない、後に、京都の機織職人が来てからは、縮緬、紹緞子などまで織られるやうになつた」

あや子「羽二重は」

父「さあ、羽二重はお父さんの子供の時分までは、かなり澤山に出来たものだが、今は産地が福井の方へ移つた。その代り、今ではお召錦紗・銘仙・コート地・富士絹・繻子……」

あや子「帯・スパンなども……」

父「さうだ。スパン・クレープ・ジョーゼット、まあ厚いものから薄いものまで、何でも出来るといつてよい。一年にざつと一千万碼、五千万圓近くの織物が出来るのだ。あや子「五千万圓！　まあそんなに出来るのですか」

父「昔は一反の織物を織るのに一月もかゝつたものだ。それがお父さんの子供の時分には、バツタンといふもので大分早く織れるやうにはなつたが、今の織機のや

桐生織物生産價額

年次	價額
大正元年	一一、九六二、八二二圓
同五年	一三、九八五、二〇七
同十年	三〇、四九四、九四七
同十五年	三二、五四六、一一五
昭和五年	三三、一八三、九六七
同十年	三五、二五一、五二九
同十二年	四七、九五四、七八三

うに一人で何臺も受持つ事は出来なかつた。だから昔は一枚の晴れ着が出来ると、親から子に何代もゆづつて着たものだ。今は織物が安く買へるものだから、昔のやうに着物を大切に思はない」

あや子「今は人絹が澤山使はれるからでせう」

父「近頃は人絹が發明された爲めでもあるだらう。何しろ桐生織物も今では半分以上人絹織物となつたからね」

賑やかな街の晝さがりを、父は問はれるまゝにいろいろと話しながら静かに歩

を運ぶ。

桐生織物関係各組合

父「お前この建物を知つて

ゐるかね」

あや子「組合でせう」

父「世間の人是一口に組合

といつてゐるが、この建

物の中には、桐生織物同

業組合や、桐生輸出入絹

織物工業組合や、その外色々の組合がある。又、東校の



桐生織物同業組合

近くには、兩毛輸出織物整染工業組合、末廣町市場街に、

桐生輸出絹織物工業組合とい

ふのがあるが、どれも織物に関

係のある仕事をしてゐる人達

で組合を作つて、桐生の織物が

盛んになるやうに色々の仕事

をしてゐるのだ。むかふの建

物をごらん。あれが内地織物

査定場。自動車や自転車で運

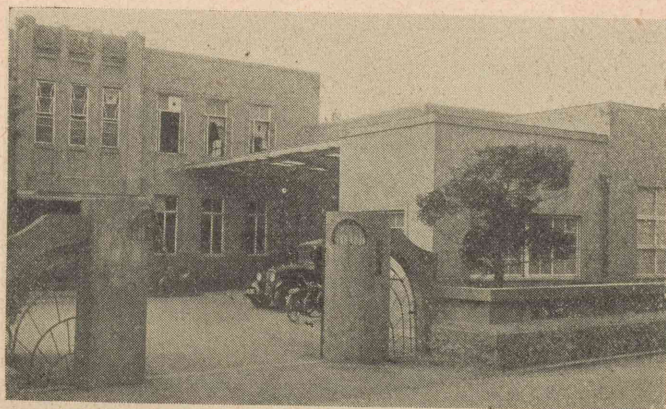
び込まれたあの織物には驚く

だらう」

あや子「ずるぶん大變ですね。まるで山のやうですね」



内地織物査定場内



桐生輸出絹織物検査所

父「今日は火曜日で市日だから一層賑やかなのだ。この建物の中で税を納めると、係の人が織物を検査して一反毎に判を押してくれる。判のないものは賣出せない事になつてゐるのだ」

商工省桐生輸出絹織物検査所

あや子「そちらの建物は？」

父「あれは國立の輸出絹織物検査所だ。三棟竝んでゐる建物の内、向つて右手が本絹、左手が人絹の織物を検査す

る所だ。一つ見せて貰はうか」

父の依頼で事務員が案内してまはる。

あや子「織物が上から瀧のやうに流れてゐるのは何ですか」

事務員「あそこで、織物のきづやしみを調べてゐます。

あの外に、經糸や緯糸を検べ、目方や長さを見て品位検査を了へてから、完全のものだけ輸出される事になつてゐます」

あや子「どこへ輸出するのですか」

事務員「先づ滿洲支那印度南洋アフリカ遠くは南米やヨーロッパバまで輸出されます。本絹織物ばかりではありません、人絹織物も輸出品はあちらで同じやうに檢

査をして居ります」

一わたり説明を受けた二人は、やがて検査所を辞した。陽は西に傾いて、人の行き来も忙しくなつた。

父「この桐生市で出来る織物が、世界中に廣まることは實に愉快な事さ」

あや子「桐生はえらいわね」

父「然し、油斷大敵だよ。織物の産地は桐生ばかりではないから、今後の桐生市民は、一層一生懸命にやらなければならぬよ」

あや子の顔は輝きつゝ、強くうなづいた。

織物関係の組合 (昭和十三年十月)
桐生織物同業組合 桐生輸出絹織物工業組合

桐生輸出入絹織物工業組合 桐生輸出織物商業組合
兩毛輸出織物整染工業組合 桐生輸出練絹織物工業組合
桐生輸出布帛製品工業組合 桐生内地織物工業組合
桐生糸染工業組合 桐生物産信用組合
桐生内地織物買繼商業組合

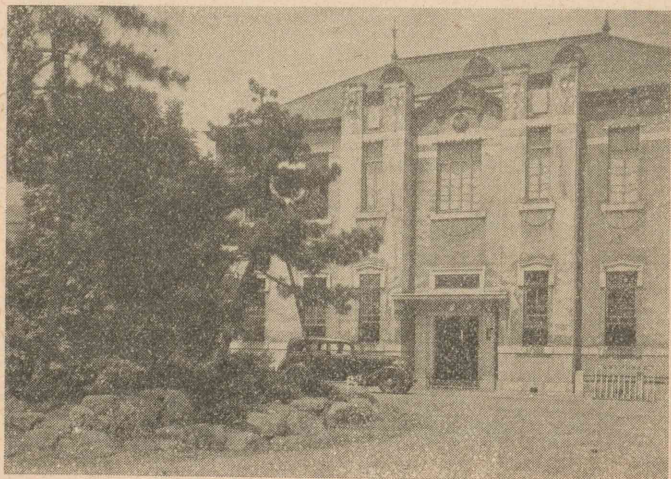
第七、工場巡り

汽笛に明けて汽笛に暮れてゆく桐生市は、四面山に圍まれ、東に桐生川の清流あり、西南に渡良瀬の大川が走つて、山紫に水清く、その名は日本國中はおろか、海外までも轟いてゐる。吾妻山から見おろせば、市中到る處に煙突が林立し、黒煙は青空に流れてゐる。今、この數多き工場

會社の中で特に古い歴史を持ち、本市産業開發のために多大の貢獻をなして、昭和九年陸軍特別大演習の際、産業獎勵の御思召を以て、十一月十二日畏くも勅使を御差遣遊ばされた、日本絹撚株式會社、兩毛整織株式會社、桐生機械株式會社の三會社を巡覽して、その大略を次に述べやう。

日本絹撚株式會社

兩毛線桐生停車場に敷かれた幾十條のレールの南側に、之を並行して長いコンクリートの塀が見える。塀の上には行儀よく三角型の屋根が波打つてゐて、その中頃にヌーツと立つた煙突から黒煙が濛々と空に舞ひ上つてゐる。これが日本絹撚株式會社である。明治三十五



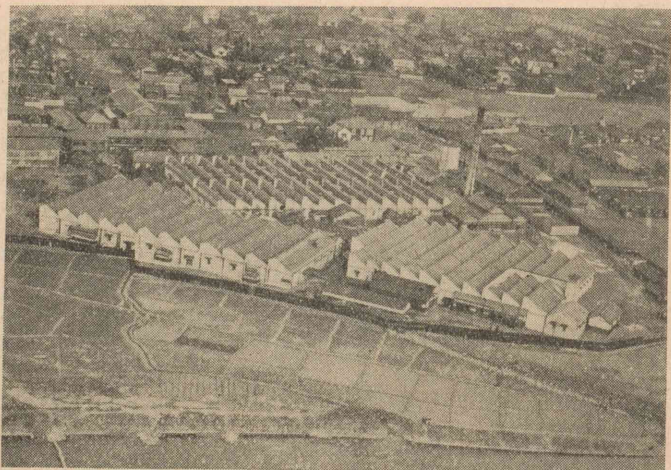
日本絹撚株式會社

年創立の當初は、僅か三萬圓の資本であつたが、今では百萬圓の大資本となり、製品星印撚糸の名聲は、遠く海を越えて印度・南米の天地にまで響いてゐる。それ故、明治三十九年六月二十八日には、恭くも閑院宮載仁親王殿下の御台覽を仰ぎ奉り、尙又、梨本宮守正王殿下には、大正三年六月二十五日と昭和九年九月十日との再度にわたつて御台覽遊ばされ、會社はこの上もない光榮を擔つて

ある。工場の中で、女工達は、幾十臺と竝んだ長い撚絲機械の間に立って、巻ききつた錘を取換へたり、切れた糸をつないだり、一寸した機械の故障を直したりして少しの暇もない。ベルトの音、錘の音、杵の音、全く音の交錯だ。天井から硝子を通して降り注ぐ太陽の光は、女工が絹糸をさばく手先に、糸の上に、錘の上に、機械の上に、チカチカと跳ねかへつてはきらめく。

兩毛整織株式會社

この會社は、新宿の南方渡良瀬の河畔にあつて、紡績織布染色仕上加工の設備を有してゐる。その製品中、特に綿糸綿布は稀に見る優秀品であり、その生産高の四分の三は、廣く歐米各國に販路を開拓してゐる。試みに工場



兩毛整織株式會社

を巡つて見るならば、先づ染色部では、糸や布を練る人、染める人、張る人、晒す人等が手足を染粉に染めながら、掛聲勇ましく立働いてゐる。次に絹織部、綿織部では、何百臺といふ織機が耳を聳せんばかりの音を立てゝゐる。その間を女工達はまめくしく働いてゐる。紡績部に入つては、エジプトから輸入された原綿が、幅廣い大きなベルトに廻轉される幾つもの機械にかけられて、細い糸に

燃られ、更にケバ焼きといつて、瓦斯がポツ／＼と燃えて
 る中を素早く通抜けて、はじめて出来上つて糸になる。
 その過程を見れば、機械の力の偉大さに驚かされるばか
 りである。この會社も亦、大正十三年と昭和九年との兩
 度、梨本宮守正王殿下の台臨を仰いでゐる。

桐生機械株式會社

桐生機械株式會社は、錦町二丁目にある。こゝで製作
 される機械の種類は、主として撚糸機や、ワインダー管捲
 機などの織物準備機械に限られてゐたが、數年來軍需品
 の製造にも力を注いでゐる。設備の工作機械は何れも
 優秀なものである。今機械工場に行つて見ると、旋盤で
 は、ドロ／＼と流れてゐる油の中を、固い鐵棒が見てゐる



桐生機械株式會社

間に削られて、錘になつたり、鑽孔機では、鐵の板に面白い
 やうにあなをあけたり、また、
 長くて厚い鐵が、大工が鉋を
 かけるやうに、容易くけづれ
 る平削機等が、物凄い勢で廻
 轉してゐる。そこに働いて
 居る職工は、機械に吸ひつけ
 られるやうな眼ざしで、少し
 の油斷も見せない。鑄物工
 場では、二つの大きな鎔鑪
 が、恐ろしい熱風火炎を吹き
 上げて燃えてゐる。その下の方から、眞赤にとけた鐵が

流れ出るのを、長い柄のついた柄杓で汲みとつて、急いで型の中に流し込む。職工の黒い顔からは、汗がポタポタ落ちてゐる。その他、木工場や、鐵工場、金箴工場、磨場等があり、その製品は、日本國內は勿論、廣く海外にも多數輸出されてゐる。

參考 (昭和十二年調)

桐生市の産業	機業家數	工場法適用工場數	職工數	機臺數	内地向織物生産高	移輸出向織物生産高
	一、一三七	一、二九五(機業以外ヲ含ム)	男一、六二二。女一一、五七三。計一三、一九五	一四、九九九	二〇、四三二、一〇八圓	二七、五二三、六七五圓

第八、市民の鑑(その一)

佐羽喜六

佐羽喜六は、安政五年栃木縣足利郡葉鹿村の青木家に生れた。資性穎敏、十一歳にして早くも深く決する所あり、江戸に出て書家高林二峯の門に學んだ。數年を経て桐生に移り、佐羽家に仕へ「辛抱十年」を所信とし、寸刻をも忽にしなかつた。かくして主家の信望を一身に集め、遂にその懇望により養子となり、専心家業に勵み、後明治二十一年歐米諸國を歴訪視察し、以て桐生織物の改善に力め、聲價を高め、又日本織物會社を建て、本邦機業界に貢獻し、「佐羽の桐生か桐生の佐羽か」とまで讃へられるに至つた。偶々佐羽家の破産に遇ひ、その責を負うて會

社を引退したが、一年の後再び擧げられて社務を司るや、粉骨碎身して盡すところがあつた。然るに、不幸清國に出張の途次、芝罘沖にて難船し遂に逝去された。時は明治三十三年四月、年四十三であつた。

森山芳平

意志のある所には必ず途が開け、希望は人を成功に導くものである。森山芳平は、幼少より機業を好み深く時勢を洞察し、巷間の染色法に飽き足らず、二十有餘年孜孜として研究を續けた結果、化學染色法に精通し、織機の改良と相俟つて桐生織物の名聲を高めた。又國內羽二重業の勃興に盡力し、進んで織物の指導審査に當り、町政にも教育にもその勞を惜しまなかつた。事天聽に達して、畏くも綠綬褒章を下賜せられ、明治三十五年六月、皇太

子殿下桐生行啓の際には、特にその工場の手覽を辱うし、親しく御下問の榮を賜はつたのである。恐懼感激した芳平は、爾來一層奮勵努力して、機業の發達と公共事業の改善とにその生涯を捧げた。大正四年六十二歳で歿した。

横山嘉兵衛

織物業發達の功勞に依つて、綠綬褒章を戴いた横山嘉兵衛は、嘉永五年新宿通二丁目に生れた人である。十五歳の時から機業に従事したが、その頃はまだよい物と言へばすべて外國品であつたので、何とかしてそれに勝る物を織出したいと考へ、日夜種々工夫をこらし、遂に紋織甲斐絹や、紋羽二重を織り出すことに成功した。それが廣く外國にまで賣出されたので、桐生織物の名聲は一段

と高まつた。明治二十年、畏くも宮城の御窓掛の御用を命ぜられた折には、始めて木製ジャカードの日本製を造り出し、國中の織物業者に非常な便利を與へた。このやうに織物業發達に對する功勞が多かつたばかりでなく、町や學校の爲めに色々な役を引受け、誠心誠意その事に力を盡し、大正二年六十二歳で歿した。

廣澤村(現在桐生市廣澤町)は、古來模様織物の製造地として、その名を全國に喧傳せられた所であつた。然しその方法たるや、依然として舊に變らず、少しも改良を加へなかつた。藤生佐吉郎は、大いに之を歎き、率先して同志と計り、明治二十年木製ジカードを研究創案した。同業者も漸次にその簡便なことを悟つて、この工作法を取

先代
藤生佐吉郎

入れ、爲めに生産高は激増し、販路も大いに擴張せられた。佐吉郎は、機業改革に功勞があつたばかりでなく、社會公共事業にも盡したので、畏くも明治二十五年綠綬褒章を下賜せられた。後大正二年二月、村民等は銀製花瓶一對を贈つてその勞を犒つた。同四年一月病を得て歿した。時に年六十三歳であつた。

先代書上文左衛門は、關東買繼王の名を擅にした人である。文左衛門は、幼時より思慮深く、又剛毅果斷の風があつた。若くして漢籍外國語を嗜み、常に店員の修養に意を用ひ、織物の改善に心掛けた。特に桐生織物の販路擴張に力を用ひ、先づ關東各地に店を張り、更に支那貿易に着目して、上海英租界河南路等に支店を設け、書上洋行

先代
書上文左衛門

の名を廣めた。又桐生買繼商頭取に選ばれ、數會社の重役を兼ねた。その外、學校の設立、鐵道の敷設、電燈、電話の架設等に盡力し、私財を投じて惜しまなかつた。されば地方實業界の重鎮として、内に外に頗る多彩な存在であり、世人から多大の期待をかけられてゐたが、惜しいかな大正三年病を得て歿した。時に年五十一、その遺徳を慕うて會葬する者が實に二千餘人の多きに上つた。後、氏の功績を追懷し、有



書上左衛門銅像

志相計りて桐生ケ岡に銅像を建設してその名を不朽に傳へた。

先代
森宗作

事業の士として謳はれた先代森宗作は、資性篤實な人であつた。常に心を殖産に傾け、銀行を興して金融の圓滑を計り、撚絲改良に意を注ぎ、兩毛整織會社、日本絹絲會社、桐生撚絲會社等の創立に盡力し、桐生織物の名聲を擧げた。氏は、又渡良瀬發電の設立に力を致して、地方産業の振興を資け、學校の設立、社會事業等にも貢獻する所が頗る多かつた。氏は明治三十九年、畏くも勲六等に叙せられ、後更に藍綬褒章、下賜の光榮に浴し、昭和七年五月、七十歳を以て逝去した。

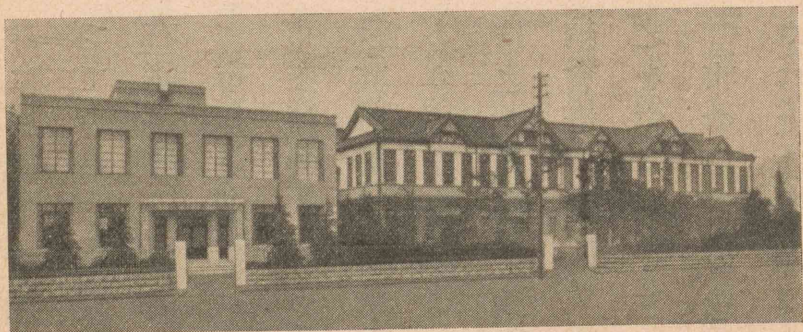
石田九野は、少壯より花本の道に志し、麥粥、梅干の粗食

その他の人物

に餓を凌ぎつつ精進し、遂に嶄新にして精巧細緻な圖紋を描き、一躍桐生廣帯の名を海内に播めた。又先代江原貞助は、安政年間横濱港に滞留し、外人の風習趣好を詳に調べ、薄琥珀の製織輸出に成功し、兩毛機業界に於ける力織機使用の鼻祖として、世人に幾多の刺戟を與へる等共に機業界の向ふべき所を示したのであつた。

第九、桐生市政の話

織物の都市、我が桐生市は、大正十年三月一日を以て市制を施行せられた。自治とは、其の地方の事情に適切な行政を行ひ、團結の美風を發揮して、公共の福利を増進し、自ら治めて行くことである。



桐生市役所

現在桐生市役所は市長・助役・収入役・主事・書記・技師・技手等を以て組織せられ、總務・教務・稅務・會計・水道等の各課に分れて其の事務を分擔してゐる。各課には課長を置き、課は更に各係に分れ、係には主任及び吏員がある。即ち、總務課は、秘書・庶務・戶籍・寄留・文書・土木・營繕・地理・都市計畫等の係に分れ、教務課は、學務・兵事・社寺・社會等の係に分れ、稅務課は、稅務・産業・衛生・汚物掃除等の係に分れ、會計課は、出納・用度等の係に分れ、水道

課は庶務・工務・經理等の係に分れてそれらの事務を執つてゐる。公設代書・公益質屋・屠場・齋場・病院等の事務も右諸係の一に屬してゐる。

市長は市會が選舉して定めるもので、執行機關であり、市を統轄し且つ之を代表し、行政事務を司る。助役・収入役・其の他の市吏員や各種の委員等は、市長の補助機關である。助役は市長の事務を補助し、市長に故障のある時は之を代理する。収入役は、市の出納會計及び國・縣の出納會計を司る。助役・収入役は、市長の推薦により、市會が之を定めることになつてゐる。

市會は市の意志を構成する議決機關で、市民から選舉された市會議員によつて組織せられ、現在その定員は三

十六名である。その任務は市の規則を設けること、市の豫算をきめること、市の行ふ事業の相談、財産・營造物の管理方法等を定めることである。市會は、市長之を招集し、その開會によつてはじめて市會としての働をするのである。會議の開閉は議長之を行ふ。市會は特別の場合を除く外傍聽が出来る。

市參事會は、議長及び市會議員中から選舉された十名の名譽職參事會員を以て組織され、其の任務は市會から委任された事項、其の他市參事會の職務權限に屬する事件を市會に代つて議決をするもので、議長は市長であり、招集するのも市長である。市參事會は傍聽を許さない。市の財政状態も、時勢の推移にもなつて年と共に増

大してゐる。経費の主なるものは、教育・衛生・水道勸業・土木等で、近年完備せる上水道施設と共に、都市計画による道路の改修及び區劃整理等、桐生の面目は着々一新せられつつある。

次に我が桐生市の、市制施行當時の歳入歳出豫算と今日とを比較して見るに、大正十年度に於ては、歳入十八萬五千四百九十三圓、歳出經常部十三萬八百圓、臨時部五萬四千六百九十三圓であつたが、昭和十三年度の當初豫算に於ては、歳入九十二萬二千六百七十二圓となり、歳出經常部三十七萬八千八百二十圓、臨時部五十四萬三千八百五十二圓に達した。その他人口の増加と言ひ、織物産額の激増と言ひ、我が桐生市は驚くべき大發展をなしてゐる。

るのである。

されば市民たるものは、常にこの桐生市政を理解し、納税の義務を怠らず、大いに自治の精神を發揮し、議員の選舉に當りては、常に嚴正に之を行ひ、苟しくも、棄權するが如きことなきやう心がけ、桐生市の發展に盡す覺悟がなくてはならぬ。

次に歴代市長の氏名を示す。

大正十年三月一日就職澤田莊太郎氏(臨時市長代理)

同 十年七月二日就職前原良太郎氏

同 十四年八月十二日就職關口義慶二氏

昭和八年四月二十八日より同年六月三日まで職務管掌

同 八年六月三日就職關口義慶二氏(現任)

第十、學校だより

正雄君、御手紙をありがたう御ざいました。御両親をはじめ皆様御元氣の由何よりです。僕も元氣で勉強して居ますから御安心下さい。さて、今日は桐生市の學校の様子をお知らせしませう。

何時か繪葉書でお知らせした縣社天満宮の直ぐ後にある立派な建物が、有名な桐生高等工業學校です。門をはひると、正面に總二階の大校舎があり、その前庭の大きな池には、噴水のしぶきにきれいな水鳥が戯れて居ます。

大講堂・學生實習用の機械工場・寄宿舎・其他澤山の建物が整然と並んでをり、色染化學科・紡織科・應用化學科・機

械科の四科に分れて居ます。色染化學科では、主として織物の原料とその性質を調べたり、染料の製法とその性質を學んだりして織物と染料との關係を研究して居ます。又紡織科は、紡績・機織・莫大小の三部に、應用化學科は、纖維素化學・油脂化學・ゴム化學の三部に分れて、それぞれ専門の研究をして居ますし、機械科では機械の設計や製作に就いて、その理論と實際とを勉強して居ます。そして、各科とも三箇年で卒業になります。右の外別科があり、商工夜學部も附設されて居ります。

卒業生の大部分は、全国各地の會社や工場に勤めたり、自分の家で工場を営んだりして、我が國工業界の進歩發展に盡力して居ます。正雄君、この學校の記念日は毎年

中等學校

十月二十一日で、この日には一般市民のために、校舎や附屬工場の參觀を許して居ますから、記念日には是非おいで下さい。

次に中等學校は、縣立桐生中學校、縣立桐生高等女學校、縣立桐生工業學校の外、私立の桐生高等家政女學校があります。桐生中學校は大正六年四月に設立され、生徒は質實剛健の氣風を養ひながら専心勉強して居ます。縣立桐生工業學校は、ずっと以前に廢された桐生織物學校に代つて、將來この地方の産業を直接に發展させようといふ市民の宿望が達せられて、昭和九年五月に開校されたわけです。それで本校には、機織科と色染科とが置かれ、機織科では、主として絲から織物を作ること、色染科で

青年學校

は絲や織物の色染めのことを勉強して居ます。

三十年といふ長い歴史を持つて居る桐生高等女學校や、主として實科に力を注いで居る桐生高等家政女學校、樹徳裁縫女學校は、何れも桐生市にとつて重要な女子教育の機關です。特種の學校には、産婆看護婦學校があります。

この外に一般の青年子弟を教育するためには、市内の各小學校に青年學校が置かれてあります。第一、第三の日曜日に、校庭で制服を着た生徒が、熱心に訓練を受けて居る様子は、正雄君もよく御存知でせう。

市内にある小學校は、現在、桐生尋常高等小學校、桐生西尋常小學校、桐生南尋常小學校、桐生北尋常小學校、桐生昭

小學校

和尋常高等小學校・境野尋常高等小學校・廣澤尋常高等小學校等の七校ですが、近く高等小學校が新設されることとです。市の發展につれて、これ等の小學校も年毎に

小學校名	児童数		職員数
	男	女	
桐生尋常高等小學校	一、〇二一	一、四九一	四三
桐生西尋常小學校	八二五	七六七	二七
桐生南尋常小學校	八七六	九五〇	三二
桐生北尋常小學校	九六〇	九五二	三三
桐生昭和尋常高等小學校	一、六一七	八三一	四三
境野尋常高等小學校	四九二	四六五	一七
廣澤尋常高等小學校	五九五	五四九	二二
計	六、二八六	六、〇〇四	二二七

昭和三十三年四月現在

児童數を増して來たので、各校とも、大増築が行はれて、全く生れかはつたやうです。どの小學校へ行つても、先づ立派な奉安殿や講堂が目につきます。校長室・職員室・衛生室・應接室等は勿論、特別教室や映畫の設備も次第に整つて來ました。この間も、父が「これからの桐生の子供は全く幸福だよ」と話してゐました。

幼稚園

小學校經常費	一九五、二〇四・〇〇
右児童一人當	一五・七五
教育經常費	二一五、五八四・〇〇
同臨時費	一七九、六一三・〇〇
戸數割收入	二一六、〇〇〇・〇〇
右一戸平均	一三・五〇

昭和三十三年四月調

幼兒のためには、市立桐生幼稚園があり、私立としては、桐生南幼稚園・明照保育園・昭和幼稚園・桐生北幼稚園・高砂幼稚園・境野幼稚園・櫻木幼稚園等があつて、

何れも多くの幼児を保育して居ます。
正雄君以上で桐生市の學校の様子を一通りお知らせしたわけです。随分長くなりましたから、今日はこれで失禮致します。

第十一、市民の鑑(その二)

佐羽淡齋

佐羽淡齋は、有名な詩人で、安政元年の生れであります。商人であります。が學問が深く、又誠に風流な人で、妙義山・榛名山を始め吉野山・嵐山・須磨・日光・松島・天の橋立等、到る所の珍らしい風景をたづね、其のよい景色を詩に作り、碑に刻んで建てたといひます。其の詩は大層優れてゐて、菁莪堂詩集・淡齋百絶等の詩集が出版されてゐます。

橋本直香

大君は常世にませとあめのした

うつ八平手は國もとゞろに

と詠まれた橋本直香は、至誠を以て皇國の爲めに盡された國學者でありました。文化四年境野村仲通（現在は桐生市）の飛脚問屋に生れましたが、三十六歳の時深く決する所があつて、家産を妹に譲り、笈を負うて江戸に上りました。當時江戸には、有名な橘守部といふ國學者が居ました。直香はその内弟子となつて、國學や和歌を勉強し、師の歿後はその後繼者として一家を成し、畢生の事業であつた萬葉私抄を世に送つて、我が上代文化の華を廣く紹介しました。

新居日薩は、今より百餘年前、本町二丁目に生れました。

新居日薩

九歳の時、秩父の僧日軌に就き、後二十一歳の時には、金澤の僧日輝に就いて修業をしました。更に二十七歳の時には、東京で藤森弘庵の塾に通ひ、一層學問に勵みました。そして間もなく、駒込の蓮久寺の住職になり、母を迎へて孝養を盡す傍、弟子を始め近所の若い者を集めて、懇切に人の道を説きました。其の熱心と學徳とにより、やがて身延山久遠寺の住職となり、日蓮宗の管長を命ぜられました。之より後、日蓮宗布教に努力したり、全國に寺院を設けたりして、世の爲め國の爲めに盡しました。東京の福田會育兒院も日薩の憐み深い心からつくられたものであります。

黒川眞頼

天皇陛下の御誕生を壽ぐため、全國民が心から歌ひま

つる天長節の歌は、黒川眞頼の謹作したものです。眞頼は、文政十二年、本町四丁目の金子家に呱呱の聲をあげました。幼時より好學の念に富み、文字通り寢食を忘れて



黒川眞頼

讀書に耽りました。齡三十の頃、某買繼商の切なる願により、東京に出て商賣を手傳ふ事になりました。が、外出する毎に書店に立寄り、本を求めて一心に讀みました。非常に記憶力が強く、一度讀んだ事は決して忘れないので、學問が大層進みました。それ故、立派な先生について一層勉強した

い念願を起し、黒川春村といふ先生の弟子になりましたところ、春村は大層その勉強振に感心し、愈々熱心に導いたので、眞頼の學問は益々進み、遂に春村の養子となり、恩師の後を継ぎました。明治二年に大學の教授になり、それより種々重い職につかれ、明治二十一年には文學博士の學位を授けられました。

吉田秋主は、寛政六年、本町に生まれました。その頃家が零落してゐたので、家産を挽回しようと決心し、製織法を研究し、二十七歳で綾織の業を始め、工夫考案の結果、新織物の數、百五十にも及びました。秋主は又學問を好み、文雅の心に富んで居たので、分家の宣秋等と俳諧狂歌を嗜み、星野貞暉ていにつき和歌を學び、その才を愛せられて、貞暉

吉田秋主

の師清水濱臣の門に入り、又橘守部の弟子にもなりました。守部は度々桐生に來て國典を講じたので、秋主との交りは親子のやうになりました。守部が本を出版する時などは費用を出し、又種々助力しました。貞暉の歿後は、桐生の歌の會を指南し、守部門下の歌集編纂に就いては大層盡力しました。

嘉永三年十二月、幕府が日光道中の助郷すけごうを、桐生新町外五箇村に賦課した時、石原泉村は、之に對して町村民のなげきを訴へ、種々努力の結果、永久に課税免除の特典を獲たのであります。

田村梶子は、天明五年、下久方に生まれました。幼時より大層賢明であつたさうです。習字を好み、十三、四歳の頃

石原泉村

田村梶子
望月福子
前原照子

には、既に大人も及ばぬ程でした。十七歳の時、幕府の御祐筆にあげ用ひられ、十四・五年勤めました。後歸郷した所、教を乞ふ者が多く、終には毎日百人餘に上りました。これ等の弟子達に、厳格な教育を施しましたので、弟子達はいづれも大層上達しました。七十六歳の高齡になつた時、高弟の望月福子に後を譲りました。福子は師の後を承けて、十數年間に互り、五百人の弟子に手習や作法漢文などを教へました。しかし、明治五年全國に學校が設立されたので、翌年から弟子を學校に引き渡しました。出藍の譽の高い前原照子も亦、田村梶子の門下生の一人でありました。照子は幼時梶子に就いて讀書を習ひ、又橋守部に就いて詩歌を學び、何れもその奥

義を極めました。近所の人々の懇望で、十七歳の年若でありましたが師匠となり、教を受くる者前後七百人にも上つたとのことであります。梶子・福子・照子は何れも女の身でありながら、このやうに子弟の教育に盡力されたのは眞に女性の鑑であります。

岩本茂登子

岩本茂登子は、彼の有名な渡邊華山の妹であります。江戸の渡邊家から、桐生の織物買繼商岩本家三代目茂兵衛に嫁しました。茂兵衛の母は、元氣な男勝りの人でしたが、至誠を以てこの母に仕へましたので、流石の母も、その孝養に感心し臨終の時「永年の親切に就いて禮をいふにも言葉がない」といつた程であり、茂登子の至孝は今も賢婦の鑑として廣く景仰されて居ます。

第十二、夏祭と恵比壽講

桐生の各神社は、それ〴〵盛大なお祭をしますが、わけでも有名なのは、八坂神社の祇園祭と、西の宮の恵比壽祭とです。

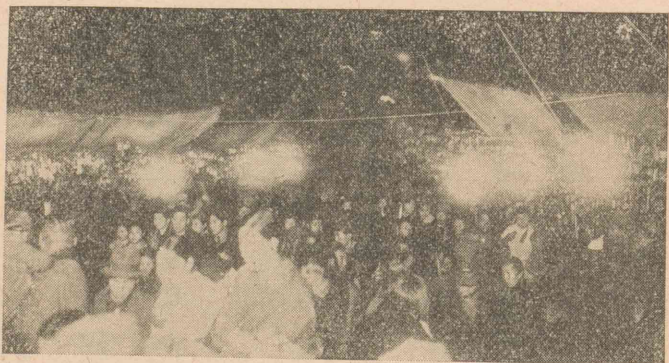
八坂神社の祭神は、素戔鳴尊・稲田比賣命・八柱御子神です。そして七月二十日から二十五日までの六日間に亘つて、夏祭が行はれます。この祭を祇園祭とも、天王祭ともいひます。祭の初日になると、神輿は、巴紋のある襦袢白足袋に向ふ鉢巻といふ勇ましい姿の青年に擔はれ、役員は羽織袴の禮服で供奉し、假殿（旅所とも云ふ）に安置されます。夜になると、青年達はお揃ひの衣裳で、町廻り

祇園祭

を致しますが、桐生にふさはしい粹ないで立ちで、優美な感じがします。二十三日には、いよ〴〵神輿渡御の儀があります。前驅は市内の頭連で、背中に花笠、胸には腹掛向ふ鉢巻、揃ひの法被、鈴のついた金棒を曳きながら、チヤリン〴〵と練つて行く様子は、江戸時代の華やかさを偲ばせます。ついで天狗様を通ります。丈の高い天狗様が、高足駄でカラコロと音を立てながら、金剛杖をついて行きます。神官の車が續きます。美しい袍をまとつて、垂纓の冠に笏を持ち、白丁が斜め後方から長柄の大傘をかざして、しづ〴〵と進みます。この美しい行列の後の方では、神輿の渡御で大騒ぎ、ドン〴〵カツカ、ドンカツカといふ勇ましい太鼓の音につれて、ワツシヨイ、ワツシヨ

い、掛聲勇ましく、揉みに揉んで進んで行きます。神輿は右に傾き、左に傾き大波を打つて、時には覆りさうになり、金色の鳳が驚いて、羽搏くかに見えます。「カチ〜」といふ拍子木の合圖に一息入れますが、神輿を昇ぐ青年達の全身は、瀧のやうな汗でびつしよりになり、顔は紅潮して居りながら、如何にも元氣よく見えます。かうして順に本町通を渡御遊ばされます。やがて、家々の軒下に御神燈が揺れて、涼しい夜が訪れる頃、屋臺では芝居が酣です。勸進帳や楠公父子の別れ等が次々に行はれ、東天の白むのも忘れる程です。参拜者の蛸集した旅所も、二十五日には神輿の還御があり、六日間に亘つた長いお祭も、目出度し〜で終りを告げます。

西宮神社に祀られてゐる神様は、蛭子神・事代主命で恵



西宮の賑

比須様大黒様といはれ、商家等では福德の神としてあがめて居ます。祭典は二月二十日と十一月二十日とに行はれます。廣い關東地方に唯一社だけ桐生に分祀せられて居て、靈驗のあらたかな事は、遠近に名高く、平素でも参拜者の絶えることがありません。

特に秋祭の當日には、前橋・高崎は勿論、東京・埼玉の遠方から、参拜者の群が押寄せて、無慮十數萬人に達します。十九日夕

方から翌朝未明までの賑ひは又格別で、境内も參道も人でうづまり、身動きも出來ず、唯、人のいきれと商人の叫びとで、むせかへる程です。縁喜商人や大道商人が、夫々飾り立て、客を引かうとしてゐますが、お寶賣りが目立つて面白い。

「さあ、買ひな買ひな」

「これは一千兩、あれは一萬兩」

「ようしつ負けつちまへ」

皆この調子で、値段が決ると、シヤン／＼と手早に手拍子して祝ふのが似つかはしい。どこからか、

安藝の宮島まれば七里

浦はな、浦な、ゑびす

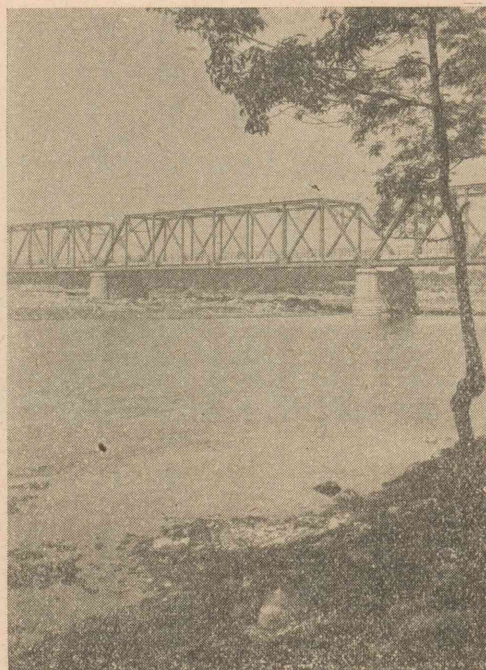
と、調子のよい歌が聞えて來る。神樂殿では踊りの最中とみえ、賑やかなおはやしが、森にこだまして、人々の波を縫ひながら廣がつてゆき、いやが上にもお祭の氣分を高潮させます。大通りでは、各商店や道路の兩側に立ち並ぶ露店商人の賣出して大盛況、奥の方では主人がゑびす顔で、店の様子を眺めてゐます。

第十三、桐生市の交通通信

街頭に立つて往來をながめると、自動車の多いのが先づ目につく。大型の乗合自動車、流線型の乗用車、私用の小型車などが走る。各種の貨物自動車や小型三輪車や自轉車などが後から後からと續く。そこを多くの人々

が足ばやに歩いてゐる。往く人も来る人も皆忙しさうである。我等はかうした往來で、織物を一ぱい積んだ自動車や数多く見かけるので、さすが「織物の街だ」とうなづける。永樂町にある織物検査場をのぞいてみると、建物の前の廣場は自動車や小型三輪車や自轉車でうづまつてゐる。こゝでは検査のために織物を下す運ぶ検査の濟んだものを積込むなど、その活動振りは實に目覺ましい。かうした交通上にも、桐生市が我が國有數の織物工業地であることがみえる。人と車の數によつて、都市の人口や商業工業の盛衰などは定められると聞いたが、このことを考へたときに、我等は言ひ知れぬ喜びを感じずにはゐられない。

明治初年までは、一筋の大通りが南北に長く通じただけで、その他は露路のやうな細い道ばかり、大間々の繭の市などにも、草鞋ばきでとぼくと歩いたものださうだ。



錦 櫻 橋

それが先覺者によつて、新式の織物機械が買入れられてから、急に工業が盛大に向ひ、街も發展し、道路も開けてき

た。今や、都市計畫の進むにつれて、道路は擴張され、或は新たに開かれ、或は舗装されて、全く舊態を改め、かつて榮

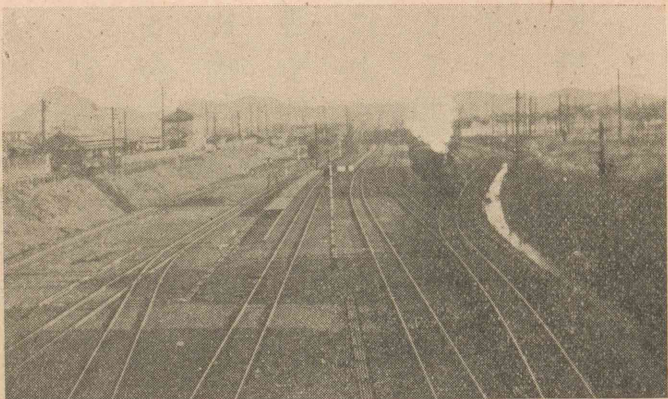
鐵道

えた馬車・人力車は殆んど姿を消してしまひ、自動車が之に代つて、市内交通の前線に立つて活動するやうになつた。市の中央からは立派な幹線道路が四方に伸びて居り、その大部分は舗装されてゐる。市の南を貫流する渡良瀬川に架してある錦櫻橋は、堅牢なもので、交通上の價値が極めて大きい。

市の表玄関としての省線桐生驛は、市の中心に近く、適當の位置を占めてゐる。明治二十一年の創設で、足尾線の起點ともなつてゐる。兩毛線は、西の信越線上越線と、東の東北本線・水戸線とを結ぶもので、此處はその中間の主要驛である。尙こゝには、機關區及び保線區等がある。市の發展と共に、驛地域の擴張及び建物の大増改築を行

昭和十二年調

驛名	乗客數	降客數	發送貨物(噸)	到着貨物(噸)
桐生驛	508,135	506,272	16,659	93,003
新桐生驛	139,325	103,544	2,146	1,643
西桐生驛	183,892	182,875	148	339
計	831,352	792,691	18,953	94,985



省線桐生驛

ひ、大桐生市の表口として威容を誇り、毎日多くの人と貨物とを吞吐してゐる。

桐生驛の北方、約三百米に、西桐生驛がある。上毛電鐵の始發驛で、電車は此處より赤城の南麓を西に走つて、前橋市に通ずるのである。

又、東京淺草への近道として、東武線の新桐生驛が、渡良瀬川を隔て、廣澤町二丁目にある。大桐生建設の暁は市の南口として益々活況を呈するであらう。

自動車

貨物

郵便局

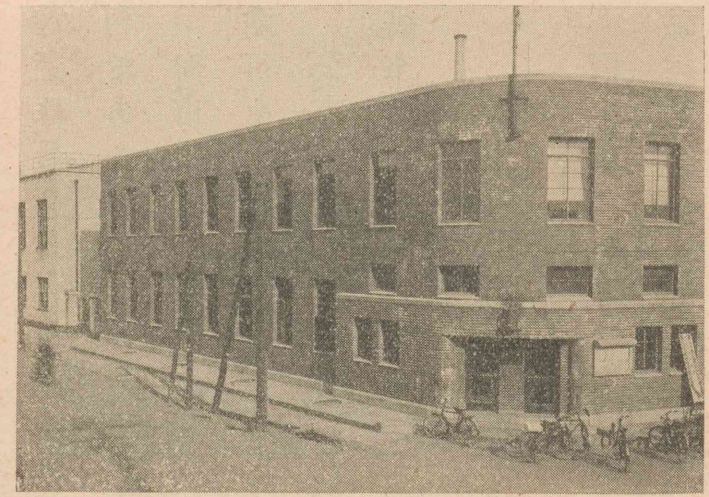
尙、社營・私營の乗合自動車があつて各方面に通じ、足利・太田・伊勢崎・前橋・大間々等の主要都市と連絡してゐる。省線桐生驛より積出される主要貨物は、織物類その他を合すると、一ケ年の總量は約一萬六千餘匁であり、移入貨物の主なるものは、石炭・人絹絲・機業機械類・板紙・米・木材等で約九萬餘匁に上つてゐる。尙他の二驛の外、自動車による貨物の出入も相當大量に達するやうである。かくて、本市の工業は日に月に盛大に向ひ、この多角的な織物工業を中心とする複雑な都市經濟組織は、交通上にも影響して地方稀に見る發達をなしてゐる。

この交通網を人體の血管に譬へると、通信網はその神經である。この神經の中樞に當るものが、市内末廣町一

昭和十二年調

郵便引受	3,581,891	配達	4,914,904
電信發信	61,964	中繼	27,604
電話加入者	1,817	区内通話	15,818,124
		区外通話	421,922

電信電話



桐生郵便局

丁目の桐生郵便局である。始めて郵便に關する事務取扱所の出來たのは明治五年で、桐生驛郵便役所といひ、本町一丁目にあつた。爾來、商工業の發達と共にその事務は日に日に繁忙となり、後に本町四丁目の建物に移つたが、それも狹隘を感じるので、現在の地に近代様式を完備して建設され、昭和六年に移轉したのである。現在は、庶務・郵便・電信・電話・保険及び爲替の

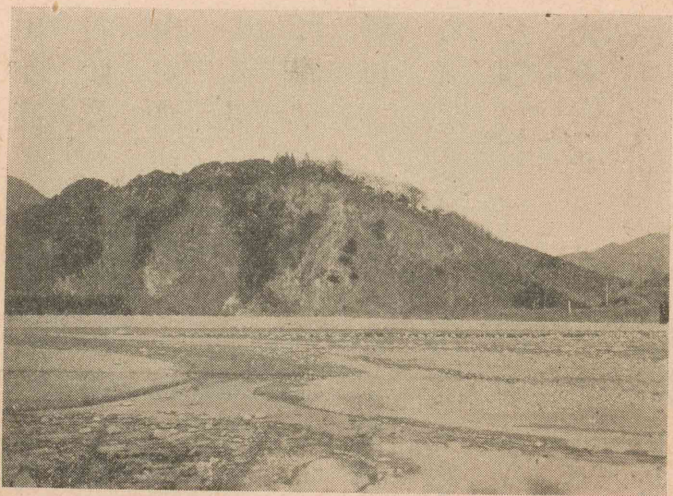
飛行場

六部に分れて、各々全能力を發揮し活動を續けてゐる。電話は、最新式の自動交換式を採用してゐるので、實に便利である。これは本縣に於て桐生市が最初である。尙、市内には六ヶ所に無集配郵便局があるので、事務の遂行を一層圓滑にしてゐる。又、市の西方笠懸村には、桐生愛國飛行場があつて、本市將來の發展を表示してゐる。

第十四、名勝をたづねて

桐生市は、四方を山に圍まれ、その中を川が流れて居り、誠に景色のよい處である。その上に歴史をもつた名勝地も少くないから、四季折々の行樂には不足がない。そ

丸山公園



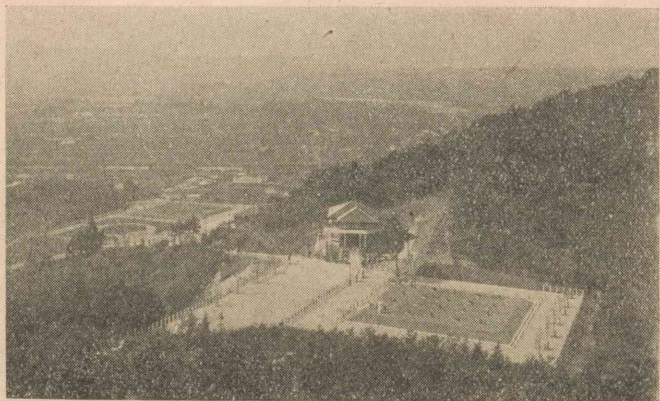
丸山公園

の中で有名なものを舉げて見ると、市内には丸山公園、上水道配水場、桐生ヶ岡公園、廣澤の茶臼山、市外の近い處には梅田の西方寺、梅林、鳳仙寺、大間々の高津戸峽、笠懸の阿左美沼などがある。

丸山公園は、市の西方にあつて、渡良瀬川に臨み、名の如く圓い山である。頂上に登れば、流石は桐生氏時代に丸のあつた所だけあつて、展望が廣い。その景

色のよいことは舊市内第一であらう。先づ北には吾妻山が高くそびえ、その西方につゞく山々の端には、赤城榛名、妙義の上毛三山を始め、浅間火山、その外、上越、信武の山が、西から南にかけて連つてゐる。東南の方には、度澤の八王子山脈があり、帯の様な渡良瀬川の下流には、遙かに關東平野が展開してゐる。又、眼下には、新宿方面の工場地帯が見え、織都桐生の輪廓は、大體一望の裡に集つてゐる。畏くも、大正天皇は未だ皇太子におはしました御時、行啓の折、わざ／＼この山上にお登りになつて、風光を愛でさせられた。今も尙、頂上には御休憩所、御靴ぬぎ石、御褒の松、又、御登山口の鐵道踏切所、御下山口の白髭神社、西北縣道前橋桐生線端には「皇太子殿下御成道」の

上水道配水場



上水道配水場

記念石標が遺されてゐる。

上水道配水場は、小曾根町と東堤町との間に突出してゐる小高い丘の上にある。昭和七年四月、本市水道工事の竣工に伴つて出来たものであるが、その位置が桐生市街を大觀するのに適當なため、勝地の一つとなつた。丘上の水道配水事務所は、本市に貴賓の御出での節には御案内申し、休憩していただくことが恒例になつてゐる。

桐生ヶ岡公園

桐生ヶ岡公園は、西久方町字峯にあり、延喜式内社美和



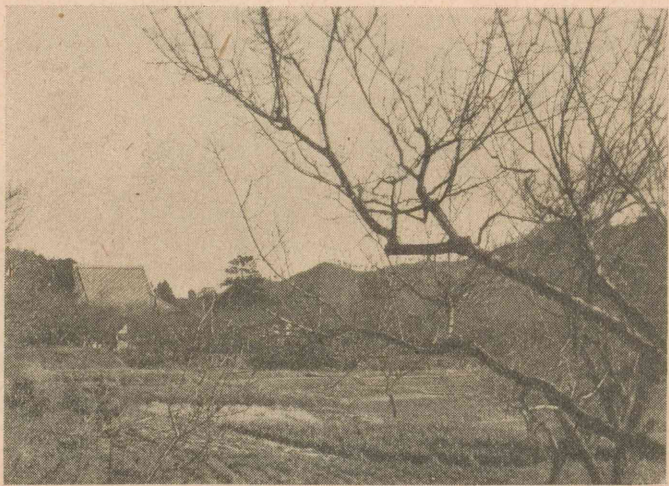
桐 生 ヶ 岡 公 園

殊に陽春四月の頃、櫻花爛漫たる時には非常に雑沓する。

神社の森につゞいた丘陵の一部である。この公園は、最初、本町有志者の経営に成つたものであるが、大正五年、町に移管された。今では櫻躑躅等も生ひ茂り、小動物も飼養され、彰忠塔や、軍事参考館もあり、尙その後、新公園も出来て大層擴張されたので、次第に公園としての設備が整備し、遊覽人も少くない。

西方寺梅林

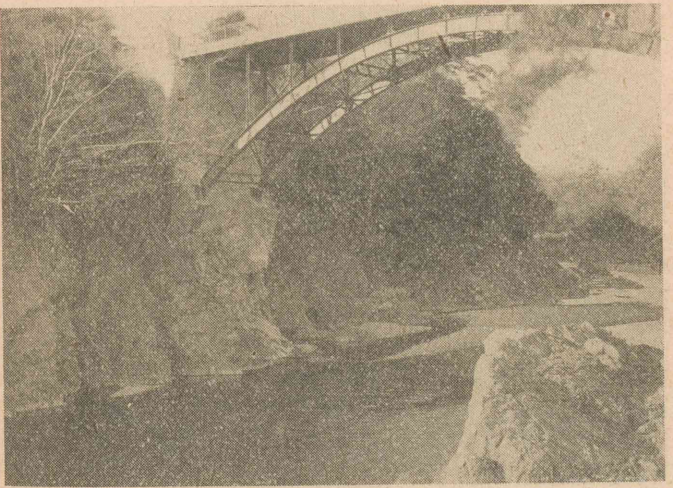
西方寺梅林は、梅田村大字上久方の名刹西方寺境内に



西 方 寺 の 梅

がある。その面積は凡そ三町歩ばかりで、陽あたりのよい傾斜地であるから、一目千本の趣があり、誠によい景色である。花の盛りには、馥郁たる清香が風に送られて、天満宮のあたりまで漂ふ。この梅林は、今より五十年程前の住職が植ゑたものである。それが、名にしおふ梅田の里である爲めか、次第に繁茂し、今で

高津戸峽



高津戸峽

は桐生近郊第一の梅の名所となつた。

津戸峽上から望めば、岸は高く、水は深く、岩上の老松と相

山田郡大間々町と、川内村とを境する渡良瀬川が、要害山の麓に至り、兩岸相峽り絶壁となつた所、約一畝を高津戸峽といふ。この處は、河水が奔流して急流激湍となり、奇岩怪石がその間に點在して奇勝を作り、東毛の耶馬溪とも稱せられてゐる。これを高

要害山は仁田山城の支砦にして里見兄弟此處に據りしが天正六年由良氏の爲に滅さる。

阿佐美沼



阿佐美沼

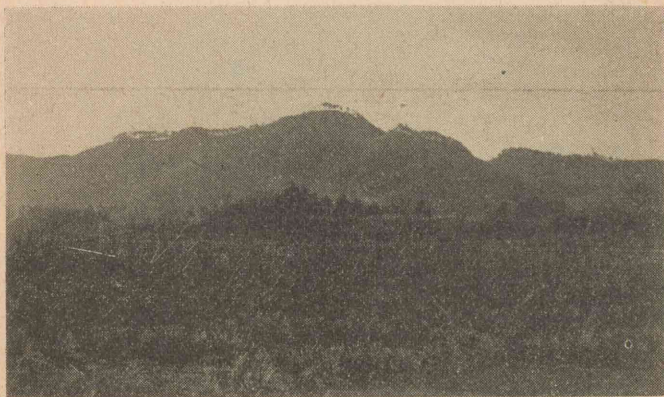
映じて、一層の奇觀である。しかも左岸には、里見兄弟の

哀史を留めてゐる要害山の城跡があり、右岸には、郷社神明宮の森に接して、近代的の設備を有し、菊花に名高い「ながめ」と稱する遊園池もあるので、秋の紅葉の頃には、遊覽の人が日に萬を數へるといふことである。

伊勢崎道から分れて、ドライブ道路が開かれ、交通は頗る

阿左美沼は、桐生市の南玄關なる新桐生驛から、西北約一畝の地點にある。近年、縣道桐生

便利になつた。沼は新田郡笠懸村大字阿左美、村社八幡



望遠山白茶

景色がよくなつた。

宮の北にあり、往時の渡良瀬川の河跡沼である。氷上面積約十三ヘクタールで、近年までは鯉・鮒じゆん・蓴菜等、水産物の養殖池であつたが、今はボート遊び、魚釣などの遊覽地と化した。最近、この沼の東方、元小沼の地に、縣營阿左美東貯水池（灌漑用）が完成して、阿左美沼と一體となり、その附近は水郷化され、一層

茶白山

茶白山は、廣澤町三丁目にあつて、高さ約三百米、本市近傍で家族づれのピクニックコースに適する八王寺山脈中の最高峰である。頂上は、渡良瀬川を真中に挟んだ大桐生の全貌を大觀するのには、非常によい展望所である。この地には、天文の昔、新田金山城主由良氏の家臣金井太左衛門が、上杉謙信の大軍を邀へ、その東進を沮んで、壯烈なる最期を遂げた史話があり、堀切・腰曲輪など、當時の城構の一部を存してゐる。

第十五、市民の鑑（その三）

日露戦役の始め、海軍部内屈指の航海士であつた海軍少佐丸橋彦三郎は、軍艦八雲の分隊長として、戦争に参加

丸橋彦三郎

しましたが、翌三十八年には任務がかはつて、日本丸の航海長となりました。此の頃、ロシアでは、東洋艦隊の全滅後、バルチック艦隊を回航させましたが、當時少佐は、日本丸から更に信濃丸の副長となり、彼等の消息を捜るため、遠く支那の沖合に居りました。時しも、遙か彼方に黒い浮雲のやうなものを見掛けたが、これこそ正しく、敵艦隊の黒煙であることを確めた信濃丸は、早速、旗艦三笠に坐乗してゐる聯合艦隊司令長官海軍大將東郷平八郎に宛てて、「敵艦見ゆ」との電號を送り、之が日本海大海戦の勝因をなしたのであります。かく武勳を輝かした少佐は、累進して少將となり、海軍大學校で航海術の教官となられたこともありましたが、數年後勇退せられました。が、從

四位勳二等功三級の榮譽を擔ひ、昭和三年三月逝去せられました。

森邦武

陸軍少將森邦武は、明治元年本町四丁目に呱呱の聲を擧げました。生來非常にやさしい方で、しかも穎敏沈毅果斷で、思ひやりが深かつたものですから、兄弟仲など人も、人のうらやむ程だつたさうです。二十歳の時、笈を負うて東京に出で、士官候補生として、身を軍籍に置いてから、陸軍少將從四位勳三等功三級に進み、大正六年豫備役拜命まで、三十餘年間も軍事に盡され、又後進者の指導等にも盡瘁せられました。殊に、對支政策に就いては卓見を持たれ、日支親善に努力せられました。が大正十三年他界せられました。

新井龜太郎

陸軍中將新井龜太郎は、明治八年、機屋の家に生れ、幼い時から、「軍人として身を立てたい」と決心し、十六歳の時出京し、錦城學校に入り、其の後、士官學校を卒へて、高崎、金澤等の聯隊に赴任し、或は臺灣守備の任に當り、到る處に勝れた功績を残し、更に陸軍大學に入學されましたが、日露の國交が斷絶するに及び、學業半ばで出征されました。そして、旅順要塞攻圍戰に参加し、東雞冠山舊砲臺攻撃に方つては、彈雨の降り注ぐ高粱畑で、縱横無盡に奮戦せられ、敵の猛射に遭つて左の股を射貫かれました。その傷が癒えて後、再び戦線に立たれ、舊に倍する活躍をなされました。後年、日支關係が複雑になるにつれ、選ばれて支那駐屯軍司令官となつて天津に派遣され、各國代表者間

にあつて、よく重い任務を果し、國威を宣揚し、國際親善の爲め努められました。昭四年、旭川の第七師團長に親補せられました。かくて、軍人生活三十年、功成り名遂げ、陸軍中將從三位勳二等功四級の身を以て勇退し、爾來、全國を巡つて軍事思想の普及に努められました。昭和七年十一月伊勢崎高等女學校講堂に於て講演中、あの乃木將軍の詩「凱歌今日幾人還」を吟じつゝ、壇上の華と散つた最期こそ、將軍の本懷ではなかつたでせうか。

以上、市民の鑑として、十數人の人々の事蹟の大略を記しました。この外、昭和十三年十月事業半にして逝去せられし、大日本雄辯會講談社々長野間清治の如く、文章報國を以て其名を中外に知られた人や、昭和十年三月に物

殉國勇士其他

故された彦部駒雄の如く機業界に功勞のあつた人や、褒章を下賜せられた人、善行や功勞で表彰せられた人など、皆我等の尊敬すべきであります。特に、日清日露の戦役を始め、今次の支那事變に及ぶ名譽の殉國勇士に對しては、國民の龜鑑として永く景仰すべきであります。

第十六、水道問答

子「おとうさん、桐生市の水道は何時頃出來たのですか」
 父「昭和七年の春、十九箇月の長い月日と、百三十萬圓といふ巨費を投じて、竣工したのだが、この事業は、急に着手されたものではなく、大正十年に市制が施行されてから後、全市民の熱望と、市長さん始め、市有志の獻身的な

努力によるものだ。お前はまだ水源地や、配水場を見學した事はないのか」

子「え、幾度も行つたことはありますが、精しくお話をきいたことはありません」

父「では簡單にお話してあげよう。あの水源地には、集水管と言つて直径約一米、長さ約二百七十米の孔の澤山あいたコンクリートの大管が、地下八米の所に、横に長く埋めてある。そこに集められた地下水が、ポンプの力で急速濾過池から調整池、調整池から配水池へと押上げられ、其處から延長七十餘軒、大小無數の鐵管を通じて、全市に配水されるのだ。急速濾過池といふのは地下水を濾す池で、調整池といふのは配水池へ押上げ

る水を調節する池である。尙瀘過池から調整池へ水を送る時に、必要に応じて殺菌する設備がある」

子「配水池はなぜ高い所と低い所にあるのですか」

父「市内の比較的高い所にある家庭には上の池から、其の他の低い所にある大部分の家庭には下の池から水を送るのだ。かうした二段の仕組で、水源池から配水池へ水を押し上げる動力代が、毎年数千圓も節約できるさうだ」

子「随分細かい所まで考へてあるのですね。でも井戸で間に合ふものをわざ／＼水道など作つて、却つて贅澤ではないでせうか」

父「いや、桐生は、昔から水質のよくない上に、水量が乏しい

ので、随分苦しんで来たものだ。それに、都市が發展する爲めには、水道の力をかりなければ出来ぬことが澤山ある」

子「では、どんなお蔭がありますか」

父「第一、衛生の方面からは、豊富に完全な飲料水が得られ、市民の健康を増進し、生活環境を清潔にする。傳染病は一般的に豫防ができるが、其の内、特に消化器系統のものは、市民の心掛次第で撲滅出来ると言つてもよい。第二に、火防上からは、消火栓といつて、ポンプの働きをする水道の水口が、四百七十一箇所市内到る所にあるので、まづ心配はあるまい。その外、水を必要とする産業の發達、一般文化施設の利便を助けることなど、我

我のやうな都市生活者とは、切り離す事の出来ない關係を持つて居る」

子「でも、萬一空襲でも受ける様な事になつたら、井戸にはかなはないでせう」

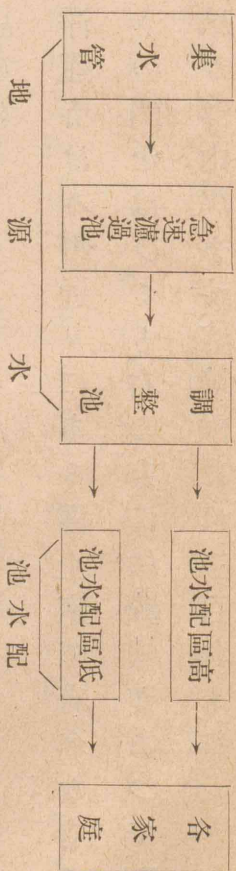
父「その點に就いては、桐生の水道設備は、大層優れて出來て居る。水源地や配水場・水道事務所といふやうなものが、一つ市内、それも僅か二軒足らずの所にあつて、經營警戒が便利であるし、その上、それ等が皆自然の林や山の上にあつて、水面は全く芝で覆はれて居るから、空襲に對しては先づ安全と言へよう。規模の大小とか、配水量などに就いては、一年の使用量が東京市の一日に當る位で問題にならぬが、地の利や、地下水を殆んど

その儘給水して居る點などでは、全國に誇り得るさうだ」

子「大層よくわかりました。ついでに、加入法や、使用料のお話もして下さい」

父「それは、市の水道使用條例に精しく定めてあるが、大體をお話すると、まづ加入法に、新設申込と給水請求との二つがある。新設申込といふのは、全く新しく設備して給水を受ける場合で、材料と工事費の實費を負擔せねばならぬ。給水請求といふのは、既に設備のある場合で、設備の所有者と、使用人の連署で請求さへすれば、無料で加入ができる。使用料は、普通家庭では、月額十軒までは一圓、それ以上は、一軒毎に二十軒までは七錢

五十坪までは六錢、五十坪を超えると五錢といふ割で増加することになつて居るが、湯屋とか工業用に使用されるもの、又は、噴水、泉池、庭園、臨時工事用等に用ひるものなどは、それ〴〵使用性質によつて料金が異つてゐる。現在の給水戸数は約七千戸、延べ人員にして五萬人に當るさうだが、將來この使用料は、市の立派な財源ともならう。勿論これまでには、市として多大の犠牲を拂ひ、尙且、一般使用者には出来る限りの便宜を圖つてゐるのであるから、我々はよく之を理解し、お互の幸福のために、十分水道を活用するやうに努めねばならぬ」



第十七、お寺参り

圓満寺

桐生ヶ岡公園入口の堤に沿つて北へ進むと、幾段もの白い石段と高く築きあげられた石垣がある。此處が圓満寺です。

この寺は、眞言宗の寺で、千百二十年の昔、平城天皇の大同年間に、弘法大師に依つて創められたと傳へられて居ます。寺は眺のよい高地にあります。近年までは立

木の鬱蒼と茂った山の中にあつたので、俗に「峯の寺」とよばれてゐた。本尊は薬師如来であり、毎月十五日のお説教はこのありがたい本尊の前で開かれるとのことです。

寶物には、十六羅漢の像、涅槃の像、蓬來山の繪など、珍しいものが澤山あつたのですが、幾度も火災に罹り、特に明治三十一年四月の火事で、鐘樓と妙見堂様の外は皆焼けてしまひ、今では一つも残つて居りません。實に惜しいことです。

淨運寺は、本町通りにある浄土宗の有名な寺です。この寺の門をはひると、右の方には鐘樓があつて、可愛らしい鳩が澤山居ます。境内には、三百年も経たかと思はれ

淨運寺

る榎の木や、珍らしい百檀菩提樹などが枝をさし延べて居ます。つき當りが本堂で、その奥の方に本尊の阿彌陀様が拜まれます。北の方に續いて庫裡があり、その前に共生圖書館があり、詩人佐羽淡齋翁の石碑が建てられてあります。この淨運寺を始めて開いたのは、新田郡の靈譽玉念上人、この上人から寺を譲りうけたのは、存譽聞峯上人で、それは今から約三百五十年程前のことです。

吞龍様といふ名で、廣く市民に知られてゐるのは、新宿通三丁目にある浄土宗の定善寺です。境内にある吞龍様は、明治二十五年八月八日太田町の大光院から分靈したもので、毎月八日の縁日には、朝から澤山の人々が、子供をつれてお参り致します。

定善寺

観音院

観音院は、安樂土町にある真言宗の寺で、本尊は觀世音菩薩です。本堂の前隣の延命地藏尊は、日限ひぎり地藏尊ともいはれ、之を信仰する人が澤山あります。

青蓮寺

桐生高等工業学校の北に、青蓮寺といふ時宗の寺があります。この寺には、新田家の守り本尊である三尊佛の黄金佛が安置してあります。それは、新田金山の城主由良成繁が、天正年間に、新田郡尾島の青蓮寺から遷したものであります。寺の建築や彫刻は、珍らしい中世文化の技術を残して居ります。

寂光院

西久方町一丁目にある寂光院は、今から百餘年前、日蓮宗の信徒によつて建築された寺で、當時は「押し出し」といふ所にありましたが、明治十三年に現在の所に移轉し

妙音寺

たもので、大鷲宮(俗に「おとりさま」)があります。この寺の北に、真言宗の妙音寺があります。この寺の本堂の建築は、近代的の鐵筋コンクリート建で精巧に出来て居ります。

其の他の寺院

尙この外の寺院をあげると、次の通りです。

寺名	宗派	所在地	寺名	宗派	所在地	寺名	宗派	所在地
最勝寺	天台完	錦町	成就院	真言宗	境野町	福嚴寺	真宗	廣澤町
大藏院	天台完	東久方町	榮昌寺	天台宗	横山町	東方寺	曹洞宗	廣澤町
久昌寺	曹洞宗	天神町	重恩寺	真宗	芳町	普門院	真言宗	廣澤町
法經寺	日蓮宗	西久方町	光性寺	曹洞宗	今泉町	法樂寺	真言宗	廣澤町
光明寺	曹洞宗	宮本町	養泉寺	曹洞宗	芳町	寶珠院	曹洞宗	廣澤町
聖眼寺	真言宗	元宿町	祥雲寺	同	境野町	東澤寺	曹洞宗	廣澤町
長福寺	天台宗	本町	本然寺	真宗	境野町	大雄院	曹洞宗	廣澤町

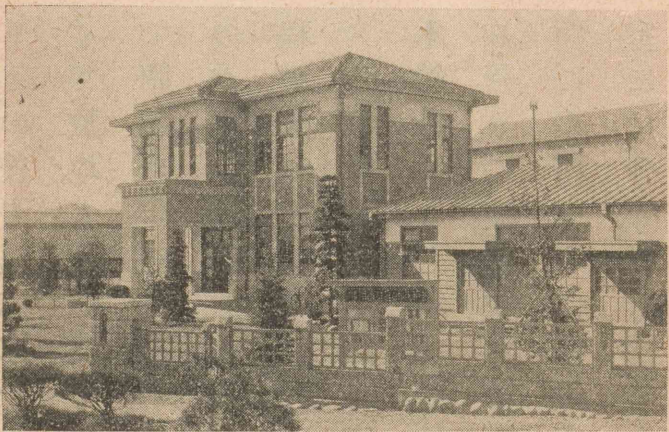
これ等の寺院の境内には、郷土で著名な人々の墓もありますが、特に名譽の殉國勇士の墓地が澤山有りますから、益々彼岸その他祖先の命日等に墓參の折には、必ず是等の勇士の墓にも、香華を手向けることを忘れぬ心掛がほしいものです。

第十八、桐生市圖書館

桐生市の西北小曾根町の一角、小高い松山を背にした、空氣の清い、日當のよい所に、すつきりとした明るい建物がある。これは昭和十年の明治節に開館した桐生市圖書館である。正門の右には、新たに着いた本の廣告が並べられ、庭の植木や芝生も美しいため、中に入つて見たい

沿革

氣分を誘はれる。



桐生市圖書館

して、市へ寄附せられた。

從來、本市には圖書館が無かつたので、誠に物足りない事であつた。早くから、幾度も建てる相談はあつたが、中々出来なかつた。ところが昭和八年十月二十三日、皇太子殿下が御降誕あらせられた時に、市内四丁目の篤志家某氏は、その御祝の記念として、小曾根町の土地凡そ十八アールを地均しを續いて巴町の某氏と、濱松町の

建物

某氏とから、同じく奉祝記念として各壹萬圓の寄附があり、その後も篤志家から土地やお金の寄附があつた。かくて、敷地も凡そ二十四アール（七百十四坪）となつたので、昭和十年三月工事に取りかかり、九月末に出来上つたのが今の建物である、市費を加へて合計二萬三千五百圓程かゝつた。

建物は、本館別館書庫の三つに分れてゐる。玄關から本館に入ると、右に手洗場があつて、先づ手をきれいにするやうに注意がある。本をよごさない爲めである。正面に事務室、右に目録室、左に男子の閲覧室がある。目録室には、分類目録、圖書名目録、著者名目録、件名索引などがあり、讀みたいと思ふ本を、自由に探すことが出来る。本

の名を紙に書いて、圖書出納口に差出せば、何冊でも借りることが出来る。男子閲覧室には六十名の席があり、片側の本棚には凡そ三十種の辭書類が備へ付けてある。此處では、商人、勞務者、學生など色々な人が靜かに讀書してゐる。二階に上ると、右手に婦人閲覧室がある。その隣には、稍々大きな見晴らしのよい特別室があり、四十人位までの會合や、小さな展覽會等に使はれてゐる。玄關の上には休憩室があつて、疲れた頭を休める事も出来る。本館の北につながる別館は、平屋建て、下足のまゝ入つて見ることの出来る新聞雜誌室と、教室のやうな感じのする児童室とがある。新聞雜誌室には、大人が立つて見られるやうな見臺に、桐生、東京をはじめ、遠く大阪、九州の

新聞まで、十數種が見られるやうになつて居り、婦人向の



兒童室

もの・商工業關係のもの等、約百種が並べられてゐる。兒童室には、數十名の席があり、本棚には、約八百冊程の、良い本・面白い本が並べられて、自由に見られるやうになつてゐる。書庫は本館の西裏にあり、鐵筋コンクリート三階建で、約五萬冊の圖書を保管するこ

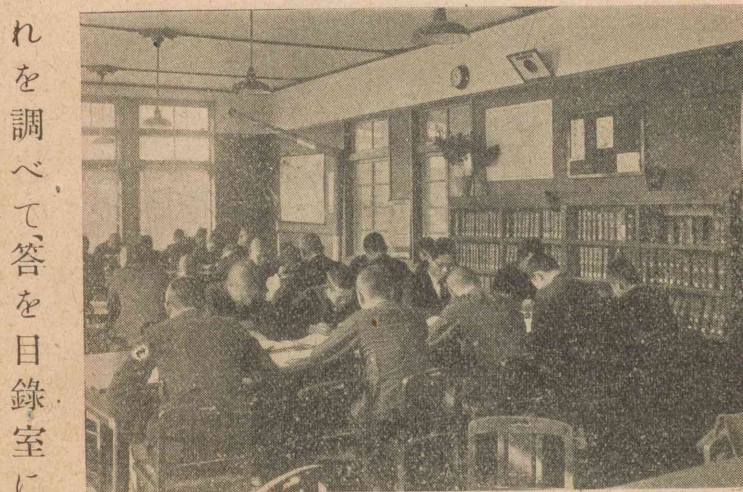
とが出来る。

藏書

圖書館は、色々の本や記録の類を集めて、多くの人の研究に役立たせる所である。昭和十三年二月一日の調べでは、買入れた本が七千九百十二冊、寄附された本が四千八百七十五冊、合せて一萬二千七百八十七冊であるが、新しく良い本が割合に多いことがこの館の誇である。集めた本は、其の種類に従つて一千に分類して、書庫の棚にきちんと並べられ、何時でも直ぐ出せるやうになつてゐる。圖書館には、稍々むづかしい本もあるが、新たに研究し始めるのに都合のよいやさしい本も澤山ある。例へば、中學校・高等女學校・工業學校などの一學年から、獨學で修養の出来る講義録とか、色々の外國語・茶の湯・生花・圍碁・將棋・園藝等に就いても、獨り學びの本がある。趣味・娯

質疑應答

樂の爲めの小説や講談等の書物も多い。



男子閱覽室

この圖書館では、質疑應答といつて、入館者の解らない事や、色々の質問にお答へし、相談相手になるやうに努めてゐる。その爲めに、目錄室に質疑箱といふ箱がある。書物やその他の事で、解らないことがあつたら、紙に書いてその中に入れる。館の人がそれを調べて、答を目錄室に掲示して呉れる。電話や手紙

協賛會

で聞いて來る者も多い。國旗の樹て方祝物の表の書き方、歲暮年玉のこと、色盲を知るのに都合のよい書物、イデオロギーといふ言葉の解釋、東京の名士の住所などは、質問せられた二三の例である。

圖書館を益々盛にする爲めに、圖書館協賛會といふ會が出来てゐる。昭和十三年二月には、會員が約七百名あつて、毎年お金や本を寄附して、圖書館を立派にするやうにしてゐる。このやうに、敷地、建物から圖書の購入費まで、多數の人々の篤志によつて支辨されてゐるのは、珍らしい。これは、桐生市の人々が、社會公共の事に盡力奉仕してくれる證據で、誠に喜ばしいことである。わが日本

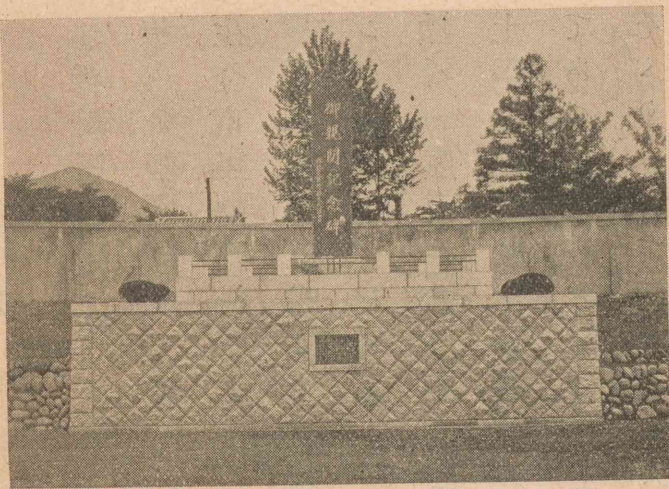
の國運の進展は、國民の奉公の精神によることが多い。お互も、何時も心して、我が家の爲め、世の中の爲め、役立つ人となりたいものである。

人は誰でも、一生涯その道々の修養に努めなくてはならない。この修養には、他の人から教へを受ける事も必要であるが、自分自身で工夫し研究する自學自修が一層大切である。図書館は、自學自修に最も適した所である。朝の八時から夜の九時まで、入館料もなく、老若男女自由に入つて、好きな本を借りて讀むことが出来、容易く本を館外に借出すことも出来る。お互にもつとく、圖書館を利用して、修養することに心がけよう。

第十九、新川運動場

新川運動場は、我が郷土の誇りの一つである。昭和三年、市の西南部新川橋附近の河原に新設され、今や我が桐生全市民の、體育の向上と健康の源泉地となつてゐる。周圍約四一五米、東と南側の鐵筋コンクリートの大スタンド、そのスタンドより北と西へ略々扇形に廣がつた運動場の廣大さ、末は芝生になつてゐる。運動場の果ては、土手の觀覽席からコンクリート塀によつて外と區切つてある。東南の隅には、空高く鐵筋の野球用のネットがそゝり立つて、西北部のスコア板と相對してゐる。全面積凡そ二五ヘクタール、收容人員約一萬人、實に規模廣大

にして堂々たる構に驚かされる。



記念碑

此の運動場は、畏くも昭和九年秋、本縣下に於ける陸軍特別大演習の際、地方行幸の砌、近縣の消防組の御親閲を饗はせられた光榮に輝く聖地である。

運動場北側の高臺に建てられたる、行幸記念碑を拜する時、當時を追懷して感涙に咽ぶのである。

北方に高く聳える吾妻山を背景にして、心行くまで晴

渡つた秋の日などに、熱と意氣とで奮戦力闘する野球の争覇戦、或はユニフォームの色も鮮かに、綾をつくりながら敵味方入りみだれて、互に王座を目ざす蹴球戦、又は全市各學校聯合の大運動會、體操に遊戯に、豪華なる體育の大繪卷は展開される。興奮と歡喜とに我を忘れたる觀衆、運動する者も觀る者も、場に溢れた人は一體となつて、興奮する渦の中に喊聲は湧き上り、人の波は盛れ上る。かくして、我が市民の體育に對する理解と關心とは深められてゆくのである。

太陽の光を浴びて、大空の下に清き大氣を呼吸し、大地を蹴つて行はれる體育運動の中から、健康なる肉體と健全なる精神とが育まれる。虚弱な蝕ばまれた身體から

は、決して明朗闊達な精神は生れて來ない。確乎たる不動の精神も、元氣の充滿せる明るい精神も、正義に燃ゆる精神も、すべて、強健なる身體より生ずるのである。

都市の大氣は塵埃と煤煙とで埋められる。工業都市は殊にさうである。近年工業都市として長足の進歩を遂げた我が郷土にして、若し衛生體育の方面に注意を缺く點があれば、今後の大發展は望まれない。郷土の産業・教育自治等の進展は勿論、其他我等が住みよき樂園を建設する爲めには、先づ郷土の人々の身心を健康ならしめることが根本の問題である。個人として見ても、郷土の發展に就いて見ても、延いては祖國の躍進隆昌より言ふも、大切なのは各自の身心の健全なる發達である。近

年、我が國民の體位の低下を聽く時、この運動場を有し、之を活用することの出来るのは、實に郷土の幸福である。

此の運動場は、今上陛下御即位御大典記念事業の一として、我が市民の體位の向上と、我が郷土の發展との目的を以て、昭和二年起工、翌三年秋落成、爾來次第に増改築され、今日見る如き堂々たる規模のものとなつたのである。初めは、桐生市體育協會が之を管理して居たが、昭和十二年度より市の管理する所となり、今や市民の健康培養の本源となつてゐるのである。

第二十、市民の覺悟

我等は、決して郷土を離れて生活することが出来ない。

郷土こそ人間生活の力強い根據地である。故に、我が家を愛しその家運の隆昌を希ふと同様に、我が郷土を愛し、その發展を念ずるのは人情の常であり、その爲めに努力する事が我等の責務である。

我等は、桐生の歴史や、文物其の他について既に大略を學び、大いに誇るべきもののあることを知り、又、市民として、永久に忘れてはならぬ無上の光榮をも感じて居る。然し、名譽や光榮の輝くところには、必ず大きな責任が伴ふものであるから、我等市民は、愈々重大なる覺悟をもたなければならぬ。

桐生市が年と共に發展するのは、偏へに織物の賜である。従つてこの産業を益々隆盛ならしめる必要がある。

それには、眼前の利益にとらはれず、正直親切勤勉は勿論、工夫・研究・改良・進歩等あらゆる努力を拂ひ、品質・價格は固より、特に信用に於て、必ず他の織物都市に優るやうに精進すべきである。

産業都市に生活する人は、やゝもすれば物質的に流れ、道徳的には缺陷を生じ易い傾があるから、殊にその點に就いて修養につとめなければならぬ。講話・講演・講習會等に出席し、學校や圖書館の設備を利用して自分を磨く方がよい。男女青年團やその他の團體に入つて實踐的修養をするのは更に大切である。修養ある善良なる市民が多ければ多い程、その市は健全に發展する。

凡そ、その土地を發展せしめ、相互の福利を増進させる

には、種々の施設を要する。教育・産業・交通・衛生・水道・警備・社會事業、其他各般の事業に多額の費用のかゝるのは當然である。従つて、吾等は一身一家の爲め、愛する子孫の爲め、將又郷土の爲め、國家の爲めに進んで納税しなければならぬ。例へば、本市にては小學校兒童一人に對し毎年平均二十圓内外の費用を要する。之によつて、立派な日本國民が養成されるのであるから、すべての人が喜んで其の費用を納めるべきである。すべて税金は、「義務」だとか「取られる」、とか考へずに、感謝の氣分を持つことが大切である。

都市生活者は、農村生活者に比して、心身の健全を失ふことが多い。都會の者は衣食住が華美に流れ、風俗は亂

れ易く、人情も輕薄になり勝ちであるから、大いに反省しなければならぬ。又、生存競争の烈しい爲めに、健康状態が劣つて居る。本市の如き産業都市の人は猶更である。故に工場従業者は勿論、一般市民も、大いに保健衛生に留意し、一層體育運動を奨励實行して、體位の向上を圖り、「健康第一」を期さなければならぬ。

都市が發達するに従つて、各地から轉住する人が多くなる。是れ等の人々は親戚知己親交者が少なく、その上土地の歴史や事情にも精通しないから、郷土觀念の乏しい傾向があるのは已むを得ない。永年住馴れた村落に居る時とは異り、「氣の毒だ」「耻しい、きまりが悪い」「すまない」「お互の爲めだ」「土地の爲めだ」といふ考が不足勝

であり、個人的利己的に流れ、公共心や公德心に遺憾の點を生じ易いから、市民たる者は大いに反省して、此の缺陷を是正しなければならぬ。即ち、神社、佛閣の清淨、道路や下水の清潔、學校其他公共建物、公園等の愛護、交通や諸會合等の道德を始とし、社會公衆に對する德義を守り、苟も他人に迷惑を及ぼすやうな事を慎み、進んでは公共の福祉増進の爲めに貢獻し、一層明るい桐生、住みよい桐生を建設する心掛が肝要である。

要するに、この世の中は、隣保相愛、共存共榮でなければならぬ。我等は「國民精神作興詔書」に

「入りテハ恭儉勤敏業ニ服シ産ヲ治メ

出テテハ一己ノ利害ニ偏セスシテ力ヲ公益世務ニ

竭シ」

とある。聖旨を服膺し、益々一致團結して、愛すべき光輝ある我が郷土、大桐生市の發展の爲めに邁進すべきである。

(終)

附記

紙數その他に限りあるを以て、以上第一より第二十までの記事に止めたるも、この外、特に左記に關しては、その目的任務、事務事業などをよく知つて、協力援助、利用心得等、市民としての理解を深むべきことが尠くない。

記

- (一) 區、區長、伍長、委員、伍長、方面委員
- (二) 警察署、稅務署、登記所、區裁判所、出張所、土木出張所、職業紹介所
- (三) 銀行、會社、商工會、議所、商工業組合、各種產業組合、納稅組合、衛生組合、健康相談所、消毒所
- (四) 農會、警防團、消防組、防護團
- (五) 各種團體教育會、銃後奉公會、國防義會、方面事業助成會、軍人分會、傷痍軍人分會、軍友會、男女青年團、國防婦人會、婦人會、小學校後援會、愛國婦人會、赤十字社、軍人援護會、醫師會、齒科醫師會、藥劑師會、產婆看護婦會

桐生市郷土讀本 (終)



桐生市郷土讀本

特價 金貳拾錢

昭和十四年三月十日 印刷
昭和十四年三月十五日 發行

編纂者
發行者

桐生市教育會

印刷者

東京市神田區鎌倉町十九番地
井關敦雄

印刷所

東京市神田區鎌倉町十九番地
明治印刷株式會社

不許
複製

發賣所

桐生市本町五丁目五十二番地
振替口座東京四七二七四番

白木屋書店

電話二〇三四番

桐生市郷土讀本正誤表

頁	行	正	誤
目次二	五	百一	百十
本文三	四	千里	千里
八	一〇	堀割リ	堀割リ
一五	八	西方寺	西、方寺
一九	上	當時	發時
二七	下ヨリ二	自動自轉車	自動自動車
三〇	一〇	群馬・埼玉・栃木	群馬・栃木
三八	一〇	絹織物	絹物織
四三	一	出来るのだ	來出るので
四六	九	ヨローツパ	ヨローツパ
四七	五	之と	之を
四九	六	響いてゐる	響いでゐる
五〇	一〇	忝くも	恭くも
五二	一	エジプト	エジプト
五三	一	ケバ焼き	ケバ焼き
五六	一	金箴	金箴
		ジャカード	シカード
七〇	表	桐生西尋常小學校	桐生西尋常小學校
七八	七	互リ	互リ
八六	三	「織物の街だ」	「織物の街だ」
九四	一	北には、	北には
九八	四	廣澤	度澤
九九	終	高津戸橋上	高津戸峽上
一〇〇	六	遊園地	遊園池
一〇一	三	水上面積	水上面積
一一〇	二	八王子山脈	八王寺山脈
一一三	終ヨリ五	円満寺	圓満寺
一一四	七	妙見堂	妙見堂様
一一五	一	白檀	百檀
一一七	表二段目三	天台宗	天台完
一二八	表八段目六	天台宗 眞言宗 たまはりたる	天台宗 眞宗 禱はせられた

4
1

4
1

群馬県立図書館



1742372-4